異世界遊覧記

ファイナルトム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界遊覧記

【Ｎコード】
Ｎ１８１８Ｔ

【作者名】
ファイナルトム

【あらすじ】
２０１２年４月１２日、雄村雨という少年は車に轢かれ昇天してしまい、神の御意向で０年～中世がごちゃ混ぜになった異世界へ転生してしまった。ゲームで手に入れた技術と神に魔改造されたｉＰｈｏｎｅを片手に異世界を生きてゆく！

（定義があいまいなので違うだろう！と意見も出るかもしれません。その作品関連の物を入れたら二次創作の欄に次々と入れてしまうか

もです。）

神は罪深き（前書き）

以前、書いた作品で展開を考えるのに疲れたため、現実逃避を兼ねて異世界へいきまーす的な。主人公には作者の一部を代弁してもらっております。性格は全て作者基準なのでキャラ崩壊とか起こるかもしれません。恋愛感情に関しては、その世界の人々の感情なので細かいことは気にするなっと！

主人公
雄村雨（後：ユウ・ムラサメ）
年齢：１８歳
身長：１７０．４ｃｍ
体重：６７ｋｇ
趣味：アニメ、軍事、電車
特技：なし
魔法：実現魔法

神は罪深き

２０１２年４月１２日　千葉県市原市　とあるオタ系のお店

「やっぱりこれだよこれ！ハンコックの１／２フィギュアだ！」
「おまえは本当に眼がないよな（ヤレヤレ）、拓哉？」
「キタ━━━━━━（゜∀゜）━━━━━━！！！！！クレアの１／２フィギュア！」
「大絶賛暴走中と・・・・・・お？」
「そうゆう村雨は見つけたのか？」
「え？ま・・・Ｃａｌｌ　ｏｆ　Ｄｕｔｙ：Ｍｏｄｅｒｎ　Ｗａｒｆａｒｅ　３だな。」
「戦争好きだな。」
「おいおい、せめてＦＰＳ好きと言ってくれよ。５００　ＶＳ　５００が売りだから楽しみ～」

と普通にマニア達は買い物に興じているのであった。はしゃいでるうちに日は暮れ、それぞれ帰国・・・ではなく帰化・・・じゃない！帰宅の途についた。解散地点で・・・

「じゃあな！また明日大学で！」
「おｋ！」
「お財布握り締めて待ってろよ！」
「また引用・・・好きだな！」
「おっと！」
「どうした？」
「エリネ義姉さんとエリーゼ（義妹）にお買いものを頼まれていたんだった！」
「大変だな～。」

「仕方ないさ。養子という身分故、しっかりしなければ！（なんせ大学の援助までしてもらっているし）」
「気をつけろよな！じゃな～！」
友人と別れた村雨は遠くで鳴り響くサイレンを聞きながらスーパー「矢倶須」で買い物を済ませ、帰宅の途に就く。あたりは人だかりも多く、リア・・・ＮＯ！カップルも大勢いた。
「彼女か・・・高校の時言いそびれちゃったな。大学では殆どダメダメだし・・・」
ショボーとするなか・・・横断歩道を渡っていた。
「そういやサイレンさっきから止まないな。」
ふっと鳴る方向を向いた途端・・・
「！？」
追跡されている車が猛スピード（後々２００ｋｍと判明。）で向かってくる！慌てて歩道へ戻ろうとするが、ミサイルの如く進路を変更してしまい、振り返ったのは３０ｍ切っていた。無論、間に合うはずもなく・・・
冥界のどこか
「そう落ち込むなって！その・・・ええとだな。」
「どうせ僕の人生なんてこの程度ですよ！」
死神もすっかり困り果てた模様・・・

「まぁ・・・生き返らすのは可能だけどさぁ。」
「へ？」
「そこはアホ神様と話してからな！私にはどうしようもできんよ！」
「アホ神て・・・言っていいのか？」
「げ！な、内緒で・・・サボってるのばれそうだし＜＞」
「あんた小野塚小町だな！」
「な、なぜ！？」
「それは・・・かくかくしかじか（四角いムーブ）・・・とゆうことだ。」
「なるほど、全くわからん！」

しばらくすると神のいる建物へ。普通の神かと思いきや村雨には神と思えなかった。

「ようこそ！村雨君！君をまっていたよ！」
「はぁ・・・」
「君は暴走する車に撥ねられ事故死・・・サーセンした！」
「え？」
「あの事故・・・実はね。俺の直属の部下が勝手に車に憑依してＤＥＡＤしてしまったんす！」

どうやら神の部下が車に憑依して暴走したようだ。

「神よ～しっかりしろ！とゆうか車に憑依できんのか。」
「神だからね。」
「一発殺していい？こっちはＦＰＳどころか女性関係も作れずにお陀仏だからね。そろそろあんたに鬱憤がたまってきたよ。あの巡査長並みに暴れる覚悟は出来てますが・・・」

葛飾区亀有公園前派出所では・・・
「ぶわっくしょん！誰か噂でもしてるのか？」

冥界

どこからか湧き出る凶悪な殺意をもった村雨を神は１時間かけて説得し本題へ。
「めんどくさいから異世界で生きてもらうか。」
「いい加減だな。」
「とりあえずこの紙にリクエスト書いといて。」

・とりあえず思考実体魔法があればよい。
・現代兵器・武器を好きなだけ使えるように。

「だけ？」
「だけ。とりあえずチート性能なら。」
「りょ、了解した・・・・・・」

突然、足元が落し穴の如く、くぱぁと開き

「え！？」
「Ｓｅｅ　ｙｏｕ．Ａｇａｉｎ！Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ，Ｍｕｒａｓａｍｅ　１」

そのままっすぐ落下していく。村雨は最後に「覚えていやがれーーーーー！」とＳＲ－７１のジェット音にまけない声を上げて落ちて行ったとさ

めでたしめでたし

神は罪深き（後書き）

作者の悪い癖が発動してしまったかもです。
どちらかといえばこちらの方を優先していくかもです。
主人公の行動は作者からして「もし俺だったら」な感じで主人公を描いていきたいと思います。
今後としてオリジナル勢力に加え他作品から人物を出したいと思っておりますが、出演するかどうかは作者しだいてことで・・・
次回よりチート生活をスタートさせます。

広がる大地は乱世（前書き）

端折りすぎた気が、急展開な気がしてままならないです。

広がる大地は乱世

ギュランデューク大陸　高度３０００ｍ

「ひゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

グアムでスカイダイビングの経験をしていたが、インストラクターなしの降下はきついだろう。

「ええい！実体魔法で！」

１０００ｍ降下している間、どんなパラシュートにするか迷った挙句・・・

「ここはバンドオブブラザーズのパラシュート！出てこいやぁ！」

すると、米国製パラシュートが登場し、減速に成功。とりあえず、周囲を見渡すが、辺りは緑の平原だった。助かったとおもいつつ、地面に足をつける。

「Ｍｅｄａｌ　ｏｆ　Ｈｏｎｏｒ　Ａｉｒｂｏｒｎやっといて良かった～！」

ゲームで技術を覚える程度の能力が元々あった。平原を地面から見渡すかぎり、平和であり空気も綺麗で人影も見える。

「平和な世界だな・・・」

と思い、左右に目を向けると・・・・・・・

「え？」

左にはテンプル系騎士団に右はスパルタ風戦士団にローマ風歩兵団に加え、ガリア風騎士団。双方とも村雨を挟んでにらみ合っている。この時、村雨は思った。「Ｍｅｄｉｖａｌ２　Ｔｏｔａｌ　Ｗａｒ」を思い出した！

突然、双方で豪声が響き、突撃が始まる。

い、いきなり降下してこの仕打ちですか！転生早々のご退場はごめんだ！　と思いつつ逃げ出すのであった。双方とも部外者ということを承知だったのか追跡はこないらしい。１ｋｍ離れた地点から観察してみた所、双方合わせて８０００万人超えているのに気付いた。

大絶賛、人口消化キャンペーン中てか！？てかもろＴｏｔａｌ　Ｗａｒだな。

嫌気がさし、村を探す旅に出るが、護身用に武器を召喚することにした。ＦＰＳの経験を生かしつつ、アサルトライフルＦＡ－ＭＡＳ（バースト仕様ではない）、拳銃はＵＳＰ、サブマシンガンにＰ９０を用意した。外見はさすがにめんどいことになりそうなのでそのまま私服で。ちなみに神様から４次元ポケット的な携帯倉庫をもらっている。形は前世で使っていたｉＰｈｏｎｅ　４。メニューで召喚した武器・車両を格納し出し入れできる。念の為、ｉＰｈｏｎｅにＭ８２Ａ１、ジャベリンに加えカールグスタフを入れといた。これで準備よしと歩き始める。

だいたい２時間歩いた頃に、村が見えた。煙があがっているから村の中でキャンプファイアをやっているのだろうと、走っていくとその村は地獄と化していた。男はほぼ半数が死亡し、女性は一か所に

あつめられ、エロゲー的な展開になろうとしていた。

「まさに中世ファンタジーだな。略奪・戦争なんでもありだな。」

ちなみに村雨はどちらかと言えば女好きである。

米軍張りに村へ近づき様子を伺うと、大物貴族と思わしき人影を確認した。しかも、ピザであり鎧はきていない・・・着れなかったと言っておこう。脳裏にエロゲーのピザを思い出した。

あんな屑がいるとはな・・・

早速、ＦＡ－ＭＡＳを構え、ドットサイトで狙う。相手の武装は槍４、ソード１９、弓１。余裕を構えて・・・ピザに引き金を引く。

バーン！と響き、貴族は脳天を貫かれ即死。部隊が一瞬混乱したところでフルオートで制圧し、あえなく全滅させる。全滅を確認し、女性を解放すると、歓喜があがっている。話しかけようとすると質問攻めが始まる。

「あんたすげぇな！」

「それって武器！？どこの国にそんな武器があるの！？」

「おどろいたねぇ。あのヴェルリアル帝国の貴族をあっさり打ち取るとはねぇ！」

その反面、村はかなりの損害を受けていた。艦船に例えれば沈没するか否かの大破。

村人の質問攻めが終えると、ある村人が悟ったのか

「良かったら今夜、泊って行ってくださいね。」

「宿屋に行くさ。」

「宿屋丸焦げですよ。」

先の襲撃で宿屋と武器庫は消失していた。

「ですから私の家で泊まっていってください！」

「え？今・・・なんて？」

「私の家にとまっていってください！冗談ではないですよ。いわゆる恩返しです。」

村雨は蒸気機関車の如く、キターーと思った。まさにエロゲー的な展開だったのだ。ただ泊まるだけじゃ気が済まないので村の復興を手伝った。

広がる大地は乱世（後書き）

途中で居眠りして起きたら出勤時間になっていてびっくりしてしまいました。座りぱなしで５時間近く寝ていたんだなと思いつつ・・・作成中はエースコンバットやエリア８８のＢＧＭを聞きながらやっておりましたが、エリア８８・・・・・マッコイじいさんは俺の得意先。

その電波は異世界をも超える（前書き）

この後の展開どうしよう・・・
エリア８８の森林要塞のＢＧＭ聞いてたら体がノリノリになってしまいました。

書き方としては小説パートと台詞パートで区切っております。行の開けは自分のご都合主義なので文書がおかしくなるかも。会社でも文書下手は周知されているぐらいですので・・・毎月なんどなりなおさせられること

その電波は異世界をも超える

さて、大胆にも１０代くらいの女性に誘われた村雨。当初は１日で村を後にするはずだったが、村長の頼みで１週間滞在することとなった。主に周辺の警備が中心であったが・・・
正直のところ無人偵察機がほしかったが、１人だとそこまで情報分析能力が高いわけではないので目視で確認をしていた。現地の人に頼んでも結果は目に見えていた。アメリカだったら大問題になるな。絶対・・・

「さすがサウスフィルン村だ。あっという間に元通りだな。でも、襲われてたことが原因で人口も更に半分減ってしまったな。」
「村雨さん、弁当お持ちしましたよ。少し休憩を取られてはいかがですか？」
「え？大丈夫だよ。（元いた世界でのバイトの方が大変だったし。）」

ちなみに前世では特別養護老人ホームのパートをしていた。大学通っているだけでは生活に苦難してしまうから。学費と生活費を兼ねて。月給１２万で９時～１８時まで。週３・４日勤務で大学の日は５時から７時までの短いパートさんをやっていた。ちなみに月に１０万８０００円は稼いでいる。さらに余談だが、キャラクター性もあったおかげか、ド変態キャラと誤解され正社員並に人望があった。
ま、金は自力で稼がんとな。いくらチートが出来でも金稼ぎ自力で。ＧＴＡで武器チートは使うが金チートは絶対に使わない主義。
一応、村の警備で報酬３０Ｒ（レナウン：この世界の共通通貨頂いている。

「村雨さんてどこから来たのですか？」
「ええとだな・・・遥か遠い国だな。」
「答えずらい顔をしていますね。でも、私の勘ではこの世界の人間ではない！」
「さ、察しがいいな。確かにこの世界の人間といえば嘘になるな。」
「住んでいた所はどんな世界だったんですか？」

しばらく解説に迷ったが、ｉＰｈｏｎｅが何故か前世のインターネットに繋げた為、それを利用し解説をした。

「なんというか凄いですね！その魔法・・・じゃなくてキカイ？」
「機械だ。僕が前世に使っていたものだ。向こうではこうゆう機械は普通の人でも手に届くぐらい身近にあるんだ。さらにこれを使って遠くの人とお話したり、メール・・・手紙を送ることが出来るんだ。」
「一度でもいいから行ってみたいです。」

一応、神様製ｉＰｈｏｎｅはこの世界では不要と思われる電話機能を搭載していた。
数分後に見張りを交代し、二人は村の憩いのばへ。転生以来、ｉＰｈｏｎｅを覗いていなかった為、覗いてみた。前世の写真・音楽・動画・アプリが搭載されていた。おまけに何故か、電話帳まで友人から家族までの連絡先が載っていた。さらに驚いたことに携帯番号・メールアドレスが完璧に一致しており、メールの受信歴も変わっていなかった。

「これ・・・どうなっているんだ？」

アプリを探るとハックというアプリが目に入る。ちょっと興味を持

ち開くと・・・

前世、アメリカ合衆国ペンタゴン　サイバー課

「課長、ネズミを捕らえました。まんまと侵入してきています。」
「命知らずも増えてきたな。これまでに凄腕ハカーは今年で１２１件目だ。」
「ええとですね・・・課長。」
「そっこく逮捕だ！」
「課長！犯人ですが・・・特定できません！」
「はぁ！？寝ぼけてんのか！」
「御覧の通り・・・・・・ちなみにハカーじゃなくてハッカーです。」
「なぁぁぁぁ！」

愕然とした課長はさらにヒートアップし、訳のわからない方向に・・・

「ええい！ＫＧＢだ！ＫＧＢの仕業だ！絶対にだ！」
「あの組織はソ連崩壊の時に・・・暴走が始まったからいいか。」

ペンタゴンに課長の断末魔が響く。

後世、村雨の顔は真っ青になりかけていた。ハックから出てきたのはアメリカが試作・設計しようとしている兵器や武器の一覧であった。しかもトップシークレット・・・・・・
村雨はアプリを閉じて、他人事のようにふるまったのであった。

「さてと・・・」

立とうとしようとしたら、八幡宿駅２番線発車メロディーがなる。びっくりするお嬢さんを前に携帯を確認すると拓哉からの電話だった。

「うそだろおい！」

出るかどうか迷った挙句・・・応答をスライドして電話に出た。

（（もしもし？もしかして村雨の義姉ですか？））
（（・・・僕だ。））
（（へ？あんた誰や！？））
（（雄村雨だ・・・））
（（それ何かのジョークか？人の携帯を勝手に持っていき好き勝手つかってんだろよ！））
（（無理はないな・・・ククク））
（（てめぇ！通報するからな！１か月も好き勝手使っているなんて！））
（（１か月と１日前・・・村雨、いや僕はＣａｌｌ　ｏｆ　Ｄｕｔｙ　Ｍｏｄｅｒｎ　Ｗａｒｆａｒｅ　３を買った。））
（（何いってんのかわかんねぇのだが！死者が生き返るなんてあるはずもねェし！））
（（高校時代に修学旅行でお前はテイルズオブグレイセスＦを買い、僕はウォーシップガンナー２　ポータブルを買った。そして本吉はフィギュアを大量購入した。））
（（ちょっと待て！））
（（中学時代覚えているよな？中二の時に僕が始めていたセリフだらけの小説。））
（（！））
（（登場人物は子父＞＞こふ＜＜、金正日、金日成、キングダム！さらにスケールアップし、スターウォーズ×ガンダムシリーズ×オ

リジナル×ラチェット&クランク×エースコンバットＺＥＲＯ、６×涼宮ハルヒの憂鬱×らき☆すた×ゼロの使い魔×深夜アニメ系統ほぼ全て×無双シリーズのセリフ小説！））

（（おま！））

（（そしてＡｇｅ　ｏｆ　Ｅｍｐｉｒｅ２＞ＡＯＫ＜ではお前は僕の暗黒ラッシュの被害に遭遇し、さらに城主ラッシュに遭遇し、挙句に近衛騎兵ラッシュに遭遇し、町の人１人残し、町は壊滅！逃走中に狼にやられ勝手に敗北するパターン！））

（（マジかよ・・・・・・どうなっているんだ！？死んだんじゃないのかよ！火葬される所まで見たんだぞ！））

（（死んださ、一度な。悪ふざけした神様のお陰で異世界での存在を許された。いわゆる後世だな。））

（（リアル紺碧の艦隊や。））

（（でも何で電話がつながったんだろう？））

（（さぁな。神様がその携帯に特別な仕様を施したじゃないか？））

（（謎なり・・・この件についてだが、姉さん達とお前と本吉の秘密にしておいてくれ。））

（（分かった。どんな世界行っているのか分からんけど、元気でな！））

（（電話が使えるんだ。大丈夫だ！じゃあな！時間があいたら今日中にでも姉さんと光宏にも電話を掛けておくよ。本吉にはお前が掛けてくれ。））

（（了解！じゃなー！））

電話を切ると虚しく涙が出そうになっていた。神様の計らいで前世の情報が掴め、電話も出来ていた。言葉で言い表せないくらい感動していた。

「ええと・・・ムラサメさん？」

「すまないな。長話してしまったな。それと、僕と会話をする時は

敬語は使わなくていいよ。同年代だしね。」
「お言葉に甘えさせて、私はネリサ・フェルム・シェルラン。ネリサでいいわ。」

だいぶ日が暮れた為、ネリサの家に戻ることにした。流石に1日過ごしただけで緊張してしまう為、宿屋に変更しようと思ったが、ネリサの母（２２）が宿屋のおっちゃんに裏取引したらしく断られてしまい、ネリサの家にいることとなった。ちなみになぜネリサの母が２２歳かはどうやら薬の調合に失敗（成功？）したらしく、勢いで飲んだら２８歳若くなったとか・・・
魔法がある世界だから当然かと思っていた。

「母方様、僕の顔になにかついているのですか？」
「ウフフフ、何でもないわ。それと私の名前はシフェリよ。」

その目は食べてしまいたい的な目をしていた。甘い視線が注がれてくる。
その日は食べ終えた後、部屋に戻った。
疲れたのかベッドに横になったらすぐに寝てしまった。かれこれ６時間は軽く寝ただろう。
目を覚ました時に、ｉＰｈｏｎｅのバイブが鳴っていた。寝ぼけながら電話機をとると出たのは義姉だった。
その後、１時間近く義姉と義妹と話た後、電話を切った。向こう側は涙声がはっきりわかった。義姉はツンデレで義妹はブラコンだからな。時間をみると０：１０になっていた。眠気が完全に飛んでしまったため、富士通のノートパソコンを出し、神様限定のチャンネルで朝までらき☆すたを見ていた。

その電波は異世界をも超える（後書き）

ちなみにＡｇｅ　ｏｆ　Ｅｍｐｉｒｅ　２の話は本当です。友人と対戦し、毎回このパターンでした。セリフ小説も本当の事です。当時中２の自分はこれがきっかけで友人が出来ました。同時に女性運も遠くなりましたが・・・

流石に修学旅行はフィクションです。モデルとなった友人は別の高校でしので。とにかくゲームを買ったのは事実ですが・・・

平和な村に獣が迫る

前科より４日後のこと。

普通に過ごしていたつもりだったが、村人より一報が入る。丸で敵が来たぞ！的な表情だった為、ＦＡ－ＭＡＳを手に取るが、どうやら別の敵らしい。

「もうそれがですね！ウェアウルフとジルニトラですよ！」

え？今ジルニトラと・・・ＦＦ１３で強い部類に入った（はず・・・）。

「それと、キングベヒーモスもおまけにいてもうお手上げです！」

キ、キングベヒーモス！？いきなりハードルたけぇ・・・・・・

「被害は！？」

「果物畑が全滅です。野菜畑はなんとかです。それとまた宿屋を粉々に壊して去って行きました。幸い、主人は無事です。」

主人が無事なのは良いとして、「また」ってどうゆうことだ？

「ムラサメさん、ここは一つ頼みます。」

「了解！だけど、時間帯的にどのあたりだ？」

「だいたいですが、この時間帯あたりですね。ただ、明日は満月です。何がくるかわかったもんじゃありませんよ！」

ｉＰｈｏｎｅで確認すると２０：４３だった。とりあえず２０：０

０にアラーム（初音ミクボイス）をセットし次の日へ備えた。

次の日は、ガチムチな村の人が見張りを交代してくれた。夜に備えろとのことだが、暇だ・・・

ｉＰｈｏｎｅを取り出すも、あいつらはおそらく大学。電話を掛けるのは迷惑な為、断念。

実体魔法で前世で使っていたＰＳＰを召喚し、憩いの公園でウォーシップガンナー２　ポータブルに興じた。

「多砲塔ミサイル戦艦　ヴェグナガンとでもしとくか。」

戦艦の設計だけで４時間は余裕で遊べていた。多砲塔戦艦、多砲塔ミサイル戦艦、ミサイルドリル戦艦とか・・・

昼食はネリサ家にて頂いた・・・とゆうかここしかなかった。実体魔法で寿司でも出そうかと思ったが、ネリサが一歩先に声をかけてきた。

「そういえばムラサメ君って年はいくつ？」

「１８です。」

「若いわね～、、、ひょっとして女に興味ある？」

「（何を狙っている・・・）え？ええと・・・ですね。あ、あります。」

顔を真っ赤にして答える。ムラサメの性格上、このような質問は答えずらいのである。告白なんて尚更、自分からはいいずらい・・・言えない。

「この後、予定は？」

「ええとですね、夜に備えて射撃・・・鍛えておきたいと思います。

」

ＦＡ－ＭＡＳを持ち、村の外へ出る。数十メートル歩いた先に自ら作成したへのへの君が立っており射撃訓練に使っている。（´・ω・）　カワイソスはなしで・・・・・・

「この世界のキングベヒーモスの形状はＦＦ－Ｘに準拠しているらしいな。ジルニトラはほぼＦＦ１３準拠・・・・・・」

ウェアウルフとジルニトラって格が違いすぎないか？それ以前に強さの問題が・・・・・・

「まあいいか・・・ちょうどＦＩＭ－９２　スティンガーの標的が欲しかったところだし。」

ぶつぶついいつつ射撃に興じている内に夜になった。ｉＰｈｏｎｅのアラーム（Ｓｉｌｅｎｔ　Ｈｕｎｔｅｒ　３のクラッシュダイブの警報）が鳴り、畑を見張ることにした。
嵐の前の静けさにふさわしい状況だ・・・・・・マクミラン大尉のギリースーツに身を包み敵を待つ。

「来たようだな・・・荒らし族。」

先人はウェアウルフの集団だった。数は１２匹・・・それ以外は見当たらない。

「ステンバイ・・・ステンバーイ・・・」

何故か流暢なイギリス英語で自分に語りかける。Ｃａｌｌ　ｏｆ　Ｄｕｔｙ　Ｍｏｄｅｒｎ　Ｗａｒｆａｒｅ　で聞きすぎたことで流

暢になったのかもしれない。ちなみに、村人は根性ある若者以外を残し、屋内退避している。

「レフトターゲット・・・ウェアウルフ、３・・・フラッシュバン！」

強烈な閃光と耳鳴りがウェアウルフを襲う、その隙にＦＡ－ＭＡＳが火を噴く。

瞬く間にウェアウルフはバタバタと倒れてゆき、１匹は森の奥へ消えてしまう。が、すぐに狼の悲鳴が聞こえた。同時にジルニトラがウェアウルフを丸呑みし、こちらに接近してくる。

「来るか！ジルニトラ！ＦＦ１３で苦戦させられたことは忘れないぜ！ここで雪辱を果たす！」

スティンガーを構え、ロックオンを開始。意外と反応が良く、すぐにロックオンし、発射。

怒っているせいか、高熱を発していることが幸いか、もろ直撃する。

そのままジルニトラは墜落し、息絶える。

「さて、最後はキングベヒーモスか・・・」

今度は九七式自動砲を構え、待ち伏せすると意外と早く、キングベヒーモス登場！

でけぇぇぇ！しかも大絶賛森林伐採中・・・

「血が頭に上った奴に制御は不可能！九七式自動砲の餌食になってもらうぞ！」

放たれた銃弾はキングベヒーモスの頭部にあたるが、倒れなかった。

「え？」

もう一発放たれた銃弾は心臓部に直撃したが、倒れず、村雨の方向へ猛スピードで直進してくる。

「魔物など恐れるのに足らず！」

キングベヒーモスの渾身の突撃は時速１２０ｋｍを超えていたが、冷静に構え照準を合わせると、あの映画を思い出しつつ「Ｈｅｌｌｏ ｂｏｙ！Ｉ' ｍ ｂａｃｋ！」と大声を上げ、２０ｍｍ弾を撃ちだす。銃弾はキングベヒーモスの目を貫き穴が出来、力尽きた。見守っていた村人は驚き、宴の準備に入る。後に気づいたことなのだがこのキングベヒーモスは半ゾンビ化していたことが判明した。

あっけなく終わった魔物の襲撃。この後、魔物は一切近づかなくなったとか・・・・・・

平和な村に獣が迫る（後書き）

なんか文書考えているうちにこうなってしまったｏｒｚ

青年は王都を歩く

あれから1週間、村人とネリサと別れをおしみつつ村をあとにした。ここから5ｋｍ先に村を治めているフェアリー王国フェレナールへ向かうことにした。書物であったのだが、この国は２０００年もの間、戦争が起きなかった平和の国だった。都市はフェレナールとこの村だけで２０００年間やってきた。

道なりにあるいているうちに疲れてしまい。少し休むことにした。ｉＰｈｏｎｅを開くと着信が入っていたため、確認した。すると、閻魔よりメールが来ていた。

＞今回の件について、閻魔こと四季映姫、深くお詫び申し上げます。＜

四季映姫だと・・・！？

＞お詫びとしてつまらないものではございますが、ポケットに入れておきました。時間が出来た際に、改めて直接お詫びに行きます。特別な礼儀とかは必要ありませんので、お気軽にお願いしますね。＜

東方好きの村雨には吉報だった。その日より、映姫にあうのを楽しみに待つのであった。ｉＰｈｏｎｅを閉じると早速、ポケットからプレゼント（？）を開けると、映姫の絵が描かれたｉＰｈｏｎｅカバーであった。早速、取り付けたが、後ろ寄り悲鳴が聞こえた。ふっと振り向くと巨大なワームが2人の人間を襲っていた。

「本当にこの世界は面白いな。」

と言いつつＦＡ－ＭＡＳを取り出し、フルバーストをお見舞いする。
グォォォォォォォ！と雄たけびをあげつつノームは息絶えた。

「大丈夫ですか？」
「あ、ありがとうございます。」
フードを取ると出てきたのは絶世の美女ともいえよう美少女だった。
「（か、かわいい・・・）」
「こちらからも礼をいいます。助けてくれてありがとう。」
「礼には及びませんよ。」

少し休憩することにした３人、その間は雑談をしていた。銃の事がメインであったが・・・・・・
突然、空気を読めないｉＰｈｏｎｅ（ライオン／シェリルｖｅｒ）が流れた。びっくりする二人を後に電話に応じる。

（（もしもし？））
（（よお村雨、元気か？））
（（元気だ、ちょうど巨大なワームを殺したところだ。））
（（ワーム？））
（（まぁ、巨大なモンスターだ。））
（（ふーん・・・））
（（で、用でもあるのか？））
（（特にないんだけど、ペンタゴンがハイパーハカーにハッキングされて大騒みたいだ。））
（（ギクッ・・・え？まぁ、そんなこともあるんじゃない？トホホホ・・・））
（（なんでも軍事情報の８０％のトップシークレットをコピペされたとかで。））
（（そ、そーなのか））

（（検索してみ、Ｙａｈｏｏニュースのトップ一面がそれだから。））

（（えっとだな・・・確認しとくよ。じゃな！））

そっこく切る。

大丈夫だ・・・大丈夫だ・・・

二人を見て＼（＾ｏ＾）／・・・・・・拓哉、空気嫁！いや、マナーにしてなかった僕だな。出来れば秘密にしておきたかったことだが。

再び雑談を再開・・・今度は元いた世界、ｉＰｈｏｎｅについて話し合った。隠しようがなかったｏｒｚ

「さて、行きますか！」

「そういえば自己紹介がまだだったな。私はヴェルナ・トレーズ。」

「私は旅人のフィリア・アルフォンスです。」

「僕は雄村雨です。」

「あまり聞かない名前だな。王都までよろしくな。」

「よろしくお願いします！」

一行襲いかかってくる魔物を排除しつつ王都へ歩き始め、２時間後に王都へ到着する。

フェアリー王国首都

「僕はこれで！」

「え？あの・・・」

慌ててるように2人から離れる村雨であったが、出来るだけ人目につかない場所へ移動（逃走）した。フィリアを見てただのお嬢様と只の護衛騎士ではないと判断したためだ。変に貴族に厄介になると後々面倒になりそうだ。
そう考えつつまずは金稼ぎを優先しなければならない。なんせ手持ちは３０Ｒだけだから。貧乏レストランでも最も安くて１２Ｒはかかる。その為には、ギルドを探さなければならなかった。

街を数分歩くとギルド「魔狩りの剣」が見えたため、早速お邪魔することにした。

だが、仲はやけに暗めだった。受付の横に大剣を持ったごつい男、輪の形をした武器を持つ少女、フードをかぶった男がいた。おまけにでかい鞄と巨大ハンマーを持つ少年もいた。それを気にしつつ受付へ行くと、案外いい女性の人だった。

「あの、ギルドの入会なしで受けられる依頼はありますか？」
「おや珍しい！討伐任務の体験ね。今はこのウェアウルフ退治がおすすめです。ちなみに初心者ですか？」
「はい。全くの初心者ですが・・・・・・」
「初回の限定で無料で用心棒を雇えますよ。また、こちらから武器の貸出も行っております。万が一壊れてしまっても賠償金は請求しませんのでご安心を！ただ、依頼をこなせないと即刻強制退会となります。」
「いや、１人で十分です。」
「案外度胸ありますね。気に入りました！個人的な話になりますが、あなたのような人はタイプです！」
「そ、そうですか・・・／／／／／／」
「それではこちらに申込書に記入をお願いします！」

名前：ユウ・ムラサメ
職業：無
武器系統：飛び道具

「これだけですか？」
「はい！では頑張ってきてください！」

ギルドから出ようとすると後ろから巨大な斧を持ったでかい図体をしたおっさんが、睨みつけてきた。

「なんでしょうか？」
「てめぇは舐めた真似、してんじゃねぇか！」
「（は？関わったか？）」
「ギルドに入ったら俺に挨拶をするのが礼儀ってものよ！少なくとも５０Ｒで逃してもいいぜ！」
「（そんな金ないっちゅーの！）ああ、めんどくせぇ・・・」

思わず本音を垂らすが、どっちみちこちらを殺しにかかって来る勢いだ。完全に屍姫のあの親父さん並みに頭に血が上っているのはいいとして、周りを見渡すと人が集まってきている・・・その中には先程の三人もいた。

「ここは・・・」

念の為、服に隠してあったスネーク仕様のスタームルガーＭｋ－２（麻酔弾）を出す。

「てめぇはどこまでおれを侮辱する気だ！ここであったが３０００年目！その首を撥ねてくれるわ！」
「（１日なんだけどな・・・）ではいざ尋常に勝負！」

闘牛の如く突進してくるが、麻酔弾を体に1発受け、そのまま爆睡モードに入って行った。

周りからは歓喜と新たな魔法との声があがっているが、あの3人組みにマークされたらしい。すぐさま王都の外へ行き、ターゲットのウェアウルフを確認しＦＡ－ＭＡＳで射殺、とっととギルドへ戻ろうとすると運命のポイントに差しかっかたかの如く3人組みのリーダーが声を掛けてきた。どうやらご丁寧にストーカーされていたらしい。

「貴様、その武器と先程の武器を見せてもらおうか。」
「断る。そこらへんの近接武器と違って危険だ。」
「どうするかは貴様の勝手だ。だがな、たかがウェアウルフをそのような訳も分からない武器で倒せたぐらいでいい気になるな！」
「（煽っているのか？）どうやら話が通じないようだな。」
「君！さっきから聞いていれば師匠に対して無礼な態度ばかりじゃない！」
「勝手に付いて来てこれか・・・すまんが、もう行かせてもらう。」

とスタングレネードを取り出し、投擲し離れる。数秒後にものすごい光が発し、2人は眩しさと耳鳴りにさらされることとなった。

王国に戻った村雨はギルドにて討伐完了と証拠を提出し、報酬２００Ｒを受け取りすぐにギルドを後にした。
宿屋を探しているうちに日は暮れたが、かろうじて発見できた。

宿泊料は３２ＲでＯＫとのことだったため、ここで休むことにした。
今度こそ、のんびり休めると思ったのは今夜限りだった・・・おそらくあの2人にあった事で何か運命が変わっただろう。

青年は王都を歩く（後書き）

手持ちの残金は１８２Ｒ

Ｒはレナウンでこの世界の共通通貨単位です。

単位は最低１Ｒ　最高５００Ｒ

青年は王都に慣れていくとのこと（前書き）

タイトルは思いつきです。
分かりずらい部分は脳内補正・脳内解説・脳内アニメで頑張ってください。

青年は王都に慣れていくとのこと

フェアリー王国　王都フェレナール　宿屋「貧乏妖精」
１０１号室
久々に自分のペースで起きる事が出来たのも久々だろう。ネリサ家に厄介になっている時は、朝早くより無理やり起こされていたからな。寝る前にシュタインズ・ゲート見すぎたかな？

「さて、朝飯を食うか。」

この宿屋・・・この世界の宿屋は前世みたく食時は出ない。ここならなおさらだと思うが、とにかく物凄く腹が減った。

カウンターに行くとやけに騒がしくなっている。それを疑問にしつつ宿屋を出ようとすると宿主に呼び止められた。

「ちょっとあんた！」
「はい？」
「あんた何をやらかしたんだ？殺人？強盗？」
「え？いや、特に何もやっておらんが・・・」
「さっき、王国の兵隊が来てあんたと思わしき人物を探しておったよ。」
「多分・・・僕と極似人物だと思います。」
「世の中そうなのかね？」

話している途中にギル娘が割り込んできた。

「あ、ムラサメさん。ちぃーす！」
「君は・・・えっと？」

「魔狩りの剣の受付娘のシルエ・フォンブランです！遅れて申し訳ありません！」
「シルエさんは、この話をご存じで？」
「ええ、昨日ギルドに手配書を持ってきておりましたよ。」
どおりであの３人組が動いたわけだ。
「ちなみに報酬金は４００００Ｒだとかで。」
「４、４００００Ｒ！？それって・・・」
「まあ、１年は遊んで暮らせる金額て所ですね。」
どうすりゃいいんだ？
窓を見ると３人組と兵士数名がこちらに向かってきている。幸いムラサメを確認していないようだが、何故か似顔絵の書を周りに見せびらかしている。どうやら本気らしい・・・
「それよりお部屋に隠れていな！ここは私に任せて！」
「すみません！どうやら僕を狙っているのは事実みたいです！」
慌てて１０１号室に隠れて兵士がさるのを待つばかり・・・・・・
店主と兵士が話し合っているのが聞こえる。疑いが強くなってきているな。
ふっと窓を見るとどうやら窓はフルオープンできるらしい。ラッキー！と思いつつ窓を使い外に出ると同時に兵士が１０１号室をマスターキーで開けやがった。さすが兵士、強引だぜ・・・（後々、知ったのだが、脅したのは魔狩りの剣のボスらしい。）
「やつは外に逃げたぞ！」

「まずい！」

左へ逃げようとするとトカゲのごとくフードの男が目の前に登場！

「逃がさねぇぞ！」

「チッ！」

今度は反対方向に逃げようとするが、運動不足が逃げ切れるわけがなかった。

徐々に追い詰められてしまう時に、念の為に用意してあったスモークグレネードを投擲してみるとたまたまトカゲ男に命中し、あたりが煙が覆われた。

「何しやがった！？」

その隙に逃走する事にした・・・

街中／商業区

どうやら完全に変な目で見られている・・・・・・そこら中に僕の似顔絵がどっさり！

＼（＾ｏ＾）／と思いつつ裏路地を歩き続け王都脱出を図るが、門は完全閉鎖で荷物の中に紛れることも出来ない。

「こりゃ・・・自首はごめんだぞ！」

そもそも今までの罪歴ではハッキングのみだったぞ！この世界と関係あるのか！

考えているうちにｉＰｈｏｎｅ（君が代）が鳴り、慌てて電話に出

ると・・・

（（誰ですか？今取り込み中なんですけど！））

（（Ｍｒ．ムラサメさんですね。））↑英語

（（Ｗｈｏ！？））

（（私はペンタゴン所属サイバー課のバラク・オバマです。アメリカ合衆国よりＹｏｕに対して逮捕状が出ております。罪状はペンタゴンにハッキング及び国家機密情報の閲覧の容疑がかかっております。ただちに出頭してください。））

勿論、高校の英語平均３０点に通じるはずがなかった。

（（モリサカ君！翻訳したまえ！相手は日本人だ！））

（（村雨君、合衆国より君に逮捕状が出ているため、ただちに出頭せよとのこと。））

（（無茶言うな！））

（（素直に出頭すれば悪いようにはしないよ。ただね、ハッキングしたのが運の尽きだね！））

（（だったらあんたらが捕まえに来い！こっちは取り込み中だ！アメ公風情が！））

この大声が原因で周囲の兵士に居場所を知らせてしまった。逃げようとするも時既に遅く、囲まれていた。逃げる隙もないため、最後の抵抗に出る。

だが、その抵抗も虚しく、兵士の棒に頭を強く強打され意識が遠のいていった。

それから何時間たったのだろう。目を覚ましたらもの凄く広い寝室で寝ていた。

夢でも見たのだろうか・・・ベッドからいいにおいがする。女性が

好むような香り・・・

「やっと起きたみたいね。意識がない状態でここまで連れてこられた時はびっくりしたわ。」

「君は・・・フィリアさん!?」

「私としてはこのような強引な手を使いたくはなかったの。でも、どうしてもまた会いたくて・・・」

ひょっとして惚れた?・・・なぁわけあるか!

「どうゆうことですか?」

「私、フィリアはフェアリー王国王女。ここまで護衛してくれた謝礼をする前に貴方が行ってしまって・・・」

「謝礼なんてとんでもないです!ただの護衛で・・・何故、身分を隠したのか不明ですが。」

「あの時は隣国アスラン王国かの帰りだった。そこでワーム現れて、兵士たちを次々と・・・そこで貴方が来たことで助かったのだけど、万が一盗賊に売ってしまうことを考えてしまうと気になってしまい、身分を隠した。」

ちょっとがっかりかも・・・

「それで謝礼とは?」

「この１０００Ｒです。」

結局、お金か・・・出来れば貴方の体で・・・いかん!いかん!何を考えている!

「熱でも?」

「いえ、大丈夫です!それより街へ戻りたいのですが・・・」

「ダメ！1週間はこの城の中で監禁とするわ。外出は一切認めない！」
「んな勝手な！」
「父上からの命令よ・・・」

結局、1週間監禁生活を送ることとなった。幸いにも、まだ自由はある方だ。メイド付きだから不自由はしていない。ただ、部屋からでるのも禁止されている。

「なんでこうならなければならないんだ？」
「ムラサメ様ご自身の為とのことです。誤解を解くため、しばらくの滞在をお願いいたします。」

仕方なく納得するが、1週間もここにいるのは心に来る。まだ村にいた方が良かった。

「ムラサメさん、王様がお呼びです。」

案内されるままに王の間に召喚された。

「ユウ・ムラサメよ。娘の命を助けたことと護衛の事に感謝の言葉もない。」
「いえ、僕は当然のことをしたまでです。」
「娘からの話だとジュウというこの世に存在しない武器を使っているそうだが？」
「はい。飛び道具の一種です。」
「聞けば君はこの世界の人間ではないと。」
「はい。1週間前にここへ転生してきました。銃は前世の世界で使われている武器です。」
「ほう・・・・・君がいた世界での身分はどうなっているのだ？」

「残念ながら僕がいた世界に身分はありません。」

急に周りが騒がしくなった。

「身分がないだと！？それで世は成立するというのか？」

次々と来る質問攻めに疲れてしまい、王室を後にした。とりあえず、最後に異世界人の身分を隠しておいてもらった。その時はその時で対応したいのだ。

部屋へ戻った村雨はｉＰｈｏｎｅで富士通ノートＰＣ（ハイスペック）でエリア８８を見始めた。途中で入室して来た世話係のメイドも一緒に観賞した。メイドは初めて見るものに圧倒されつつ、アニメという動く絵にびっくりしていた。まあ、エリア８８を楽しんでくれたみたいだからいいものの、前世の世界の兵器がホイホイ出てくる作品に質問も多かった。ところどころ解説しているうちにメイドと心を許す仲（友好度）がかなりアップした。

この１日はアニメで問題のない１日を終えた。

次の日の朝、ｉＰｈｏｎｅ（東京駅／京葉線４番線）が鳴った。あわてて電話に出ると、光宏だった。

（（村雨、お前か！））

（（ああ僕だ！なんだ？））

（（ハッキングの犯人だよ！日本のニュースでも話題になっているぞ！））

（（どうしようもないぜ・・・））

（（まあ、異世界にいるから大丈夫だと思うけどよ・・・））

（（大丈夫じゃねぇ！都市に寄ったら兵士に濡れ衣で追い回された

挙句、頭を強打して気絶！おまけに城に監禁だぞ！まあ、悪い意味で監禁はされてないのだが・・・））

（（しかもさっき警察の発表で２万人体制でお前を探しているみたいだぞ。））

（（こっちは番号を掌握されているけど大丈夫かな？））

（（やべぇぞ！））

（（ん？））

（（アメリカの大統領がお前の名前を公表しやがったぞ！アメリカの威信にかけて捕まえるそうだ。））

（（・・・・・・））

ポカ――（　。д。）――ン

（（ロシアでＫＧＢ復活、村雨の捕獲・殺害を宣言。同時にアルカイダも殺害予告！））

【呆気】　。д。）ポカーン

（（ＥＵ、ヨーロッパ潜伏の可能性も否定できないとして警察３０万人動員。さらに兵士２０万人動員！））

ポカ――（ｏ゜д゜ｏ）――ン

（（しかも全世界に顔写真公開・・・））

（（ねぇ、僕って有名人？））

（（悪い意味でだ・・・・・・））

一旦電話を切ると、また誰かから電話が掛ってきた。

（（もしもし？））

（（君がムラサメだな。））↑ロシア語
（（んな！ロシア語！？））
（（君は我がロシアにより潜伏先を完全に掌握している。死にたく
なければ・・・））

とっとと切るとまた電話が鳴った。

（（千葉県警サイバー課の下山です。君に逮捕状が出ていますので
直ちに出頭を・・・））

また切るが、今度は・・・

（（?????　???????　??????　?????　????.
））

分かるか！

何とかしたいと思っていた矢先に、四季映姫のメールアドレスが入
っていたことを思い出し、メールしようとしたら・・・

「どうやら慌てているようですね。」
「え？あ、貴女は！？」
「初めまして、村雨さん。四季映姫です。以後、お見知りおき下さ
い。」
「初めましてです！四季さん、会えて光栄です！（本物だぁ～）」

ベランダから侵入して来たらしい。

「先程より電話が殺到しているようですが？」
「なにかと前世で国際的有名人になりまして、各国の政府が煩くて・

・・・」
「大変ですね・・・とりあえず、こちらも掌握しておりますので、１０秒前に友人・関係者以外からの前世からの電話は出来ないよう勝手ながら設定しました。」
「おお！感謝します！」
「それとメールアドレスですが、政府機関が掌握できないよう私専用のメールサーバーに回しました。その為、お手数とは思いますが、そちらから送信をお願い致します。送信が終わった後、以前のメールサーバーを削除します。」
「有難うございます！感謝の言葉も見当たりません！」
「前世で迷惑を掛けてしまいましたし、この世界では好きなように生きてくれるのが、我々からの意向でもあります。平和にくらすも滅茶苦茶にするのも貴方の好きなように。」
「意外な言葉ですな。」
「フフフ・・・」

しばらく談笑を続けている内に、３時間が過ぎた。するといかにも天使のような人がベランダから侵入してきた。丁寧な事に前世のマクドナルドで３人分のダブルチーズバーガーと１セット分買って気くれた。

「初めまして、村雨さん。女神界天使のサミー・エンジェルです。あなたの直属の担当となりましたので何かあればお気軽に私をお呼びください。メールアドレスと携帯の番号を勝手ながらｉＰｈｏｎｅに登録しましたので、ご確認ください。」

今度は３人で談笑を始めた。どうなるかと思っていたが、なんとかなりそうな気がした。担当のサミーは意外と前世の兵器が好きであり、アニメ好きでもあった。趣味はエロゲーだとか・・・意外だ。でも担当となったのは納得出来るかも・・・

監禁が解除されたら王都から１ｋｍ先のゴッドネスビーチで待ち合わせを約束した。どうやら僕の実体魔法が何処まででできるか知りたいらしい。

何を出してほしいか、分からんが・・・・・・

ゴッドネスビーチは始発地点

逮捕・監禁されて1週間後、、、
村雨は王室の食堂に呼び出されていた。監禁解放パーティらしい・・・タイトルからしてあまり歓迎したくないが、仕方ない。席には担当のメイドさん、フェアリー王でありフィリアの父グランバル、フェアリー女王フェルナ、そして王女フィリアがいた。

「ムラサメさんはこれからどちらへ？」
「当てもないし、しばらくはフェアリー王国へ滞在するつもりです。住む場所については自分でなんとかします。」
「それはなりません！しっかりした住居を構えないといけません！王国が援助いたします！」
「あまり迷惑をかけるわけにも・・・・・・」
「わはははは！ムラサメ君、いいのだよ。むしろ私たちが君に迷惑をかけてしまったらかね。」

1時間ほど、会話が続いていたが、食事を終った後に1つ提案をした。

「ではお言葉に甘えさせていただきます。ここから少し離れたゴッドネスビーチに住む許可をください！ただ、住居は僕がなんとかします。」
「あのビーチにか？まあ、良かろう・・・」

ゴッドネスビーチはグアム・沖縄に勝る綺麗なビーチであったが、王都から離れすぎていることと海水浴の概念がないこの世界では殆どの人がビーチに来ることはなかった。そもそも水着自体存在しない世界・・・・・・

食事会が終わったのち、メイドさんと一緒にゴッドネスビーチへ向かった。

「そういえば名前！」

「え？あ・・・失礼しました！私はセラフィー・ハイネールです！」

自己紹介を一週間しなかったて・・・まあメイドの身分あまり話さないか。

４０分後にゴッドネスビーチに到達した。綺麗な海に一瞬見入ったが、ここならそこらへんの人たちの気を引かずに済む。心境として現代兵器を出せる実験をしたかったが、監禁の件で先延ばしにしなければならなかった。

ちなみに前回のサミーとの約束はこのビーチにて現代兵器を出す実験をするということだった。住居をかまえようと思ったのは、人里から離れている（１ｋｍ程だが）からだ。もう一つは目につきにくい地形をしているからだ。

ここでセラフィーと別れると思いきや、どうやら城を事実上追い出されたらしい。メイド長の書物を今更ながら渡され、目を通す・・・いや、翻訳してもらうとメイドとしての成績が最低クラスで１位上のメイドとかけ離れていることだった。席にいたのはメイドさんを頼んだという意味を込めている意味らしい。

とりあえず、初の中規模系列の家の創造に取りかかった。前世で住み慣れた家の創造に取りかかったが、すぐに出来るわけではなく、１日を要することとなった。残った魔力で臨時にテントを出した。ただし、一つだけしか創造することが出来ず、セラフィーと一緒なることになった。最初はセラフィーだけのテントのつもりが、セラフィーが心配して来たためだ。幸いにも３人分のペースがあるため、

余裕はあった。
しばらくすると、サミーが来たが、魔力の関係で明日に変更したことを伝えると案の定怒ってしまった。許す条件としてテントにて一緒に寝るということだったが、、、

何故こうなる！

実体魔法での創造の期間について映姫が神に聞いて（脅して）教えてくれた。小規模な実体魔法は物に寄るが数秒程、中期な物は１日、大規模な物は２日かかるみたいだ。又、２次元の人物を召喚、嫁にしたり相棒したり出来る・・・・・聞いてはいけないことを聞いた気がするが、気にしないことにした。

夜２２：３０

すっかり暗くなってしまい、太陽光で蓄電したパネルを使い電球に明かりを点けた。するとセラフィーはびっくりした顔をしていた。

無理はない・・・この世界には電気という概念はないのだ。

テントに入ると・・・図ったかのごとくサミーが場所を決めてくれた。♀♂♀状に作ってくれたおかげで抵抗はあったもののサミーの顔を見ると異論を唱えることは出来なかった。それから３０分ぐらいセラフィーに僕の世界を説明しつつ、サミーと現代兵器について話し合ったが気づいたら２人とも疲れて寝ていた。とりあえず、明日の７：３０に時間をセットし、寝ることにした。

・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・

・・・・・
・・・・
・・・
・

朝７：００くらいだろうか、早めに目が覚めた。右手に変な感触が・・・やわらかくてもみもみしていて、なんだか気分がいい。

「あ・・・／／／」

喘ぎ声？

そっと目を開けるとサミーの胸を揉んでいることに気づきすぐに手を離した。幸いにもサミーは寝ぼけていてくれて気づいていなかった。

でも・・・・・・やわらかかったぁ～

生まれて初めて胸を揉んだ瞬間だった。

「おはよう、、、村雨君。」

「え？あ・・・おはよう、サミー。」

「あれ？みんな・・・おはよう！」

続いてセラフィーも起きたため、テントの外に出た。すると家が出来上がっていた。見事な再現度にびっくりしたが、一番びっくりしたのは水道管は神界のパイプとつないでいて現代生活がこの世界で出来ることと、同一食器類が揃っていた。義姉と義妹のお気に入りのコップまで・・・

一番驚いたのはセラフィーだろう。この世界とかけ離れたデザイン

に形・・・どれも見入ってしまうことだった。

さて、次は・・・・・・サミーのリクエストに答えることだった。それはこんごう型護衛艦を実体することであった。最初はびっくりしたが、リクエストに答え創造を開始。幸いにも海底が深めの場所に離れて創造してくれている。おまけに内火艇まで。

また1日かかる・・・・・・首を長くして待つのだった。

セラフィーはやけに速く様々な機能を掌握していった。お風呂を入れる方法、水道ほか。現代生活に支障がないともいってよいだろう。ｉＰｈｏｎｅで音楽を聞こうと思った矢先、スペシャルなゲストが訪問して来た。

「フフ・・・ゴッドネスビーチの土地を持つなんて変わっていたから来ちゃった。」

「フィリア王女!?」

あまり突然すぎる来訪にびっくりしてしまったが、気を取り直し家へ案内することとした。構造から内装までびっくりしぱなしのフィリアであったが、リビングでゆっくり話すこととした。実体魔法で出した日本茶がかなりの好評であったが、お茶を飲むのは2年ぶりとのこと。どうやらこの世界にもアジア系のお茶があるらしく、海を渡った先のカーギットジパングという国で飲んだことがあるみたいだ。

1時間後、王女は帰路へついた。サミーが護衛艦召喚ということをしゃべったことで明日また来るらしい。フェアリー王国の国交はそれほど盛んではないが、数日前にトリスタン帝国と国交閉鎖を宣言した。理由はフェアリー王国唯一の村を襲っい大勢の村人を殺した

事件がきっかけだった。

１４時くらいに、ベランダで海の香りを嗅いでいたら、海で遊びたくなってしまいひゃっほー！と３人で海に向かって行った。セラフィーも前世の雑誌で水着の存在を知り、一緒に海で遊びたいとのことで水着を一着召喚した。サミーは女神界から自前の水着を持ってきた。しかも、いかにも勝負水着で狙って来ている・・・・・・

３時間ほど、遊んだ後、家でシャワーを浴び食事にすることにした。材料は現地調達のつもりだったが、歓迎会で特別に、前世の様々な料理を召喚した。

寿司・・・最高級国産ステーキ・・・もんじゃ焼き・・・お好み焼き・・・大阪系たこ焼き・・・和食

どれもセラフィーにとって初めて食べるものばっかりであった。あまりのおいしさに食べるのに夢中になっていたのはいうまでもない。

召喚した直後に気付いたのだが、液晶テレビとＸＢＯＸ　３６０とＰＳ３にＰＳＰとＷｉｉに富士通ハイスペックＰＣまで再現されていた。まあ、再現をコンセプトにしたのは事実だがここまとは・・・

家事全般はサミーとセラフィーがやってくれている。手伝いたいのは山々であるが本人から大丈夫とのサインがあった。まあ、臨機応変にやるさ・・・

久々にＸＢＯＸ　３６０を点けて、エースコンバット６を久々に楽しんだ。途中で家事を終えたセラフィーとサミーも参加して順番で楽しんだ。

２３：００

すっかり遅くなってしまい、あらかじめ決めたお部屋に行くことにした。この2人の美少女と今日も添い寝したいのは山々であるが、無理な事は言えない。テントはたまたま特別だからな。

布団に潜ると、目覚ましを設定して目を瞑ったが中々眠れない。まあ、かわいい美少女2人と一戸屋根の下でこれから暮らしていくことになるだろうし・・・慣れておかないとな。

数分後くらいに、布団の中に違和感を感じた。手で探るとさらさらした髪の毛が手についた。どうやらセラフィーが慣れなくて恐る恐るな感じになっていた。今まで宿舎で泊まっていたから1人で寝るのが不安らしい。

「ムラサメ・・・今日だけでもいい？」
「え・・・／／／あ・・・いいよ。」

すると抱き枕の如く強く抱き締められた。

「ちょっと・・・セラフィー？」
「こうゆうのもありじゃない？」

明らかに誘惑している・・・一人で初めての家で1人で寝るのは不安で震えるのは理解できた。が、急に誘惑的な・・・胸が体に当たっていて心拍数が派手に上がっていった。

もし、これが本当に誘惑だとしたら僕のどこに惚れたんだ？と考えつつ温もりを感じながら就寝するのだった。

登場人物（ネタバレ注意！）（前書き）

とりあえず、ここまでの登場人物でも・・・

上限年齢・・・生まれながら制約された年齢。年齢が上限に達すると年をとらなくなり、年齢的な意味で半永久的に生きていける。ただ、第3者からの危害か、自害などで死んでしまう。生殖率の確立はかなり低く未知数。

主の世界の設定なのでマジにならないで＜＞

麻生さんの設定が無駄に長くムラサメの日本の状況を入れました。

それと義姉さんと義妹さんの紹介は後回しにしときます。

登場人物（ネタバレ注意！）

ユウ・ムラサメ
上限年齢：１８歳／１８歳
本作の主人公であり、軍事・アニメ・ゲーム・鉄道が好き。神の管理不足が原因で部下が憑依した車に撥ねられ死亡し、神のお詫びとして実体魔法と神様製ｉＰｈｏｎｅ（引き継ぎ）を授かり、新世界へ旅立つ。前世では女性関係がカルチャー的な意味で最悪だが、こちらの世界ではほぼ無縁であるか為に、敬遠されることは殆どない。武器は完全に現代銃を主義としている。新世界で暮らしている後、東方とか様々な人と関わっていくこととなる。ゲームでの技術を現実に反映する能力を持っており、召喚する武器は第二次世界大戦から現代までの銃火器がメイン。女性関係については、普通の会話は出来るものの告白等が出来ない欠点がある。ペンタゴンにハッキングした容疑で大絶賛全世界指名手配されている。

フィリア・Ｆ・アルフォンス
上限年齢：１８歳／１８歳
本作ヒロイン。フェアリー王国第３王女であるが、国ではあまり目立ってはいない。姉２人とは犬猿の仲であり、絶対に口にしない。外交経験は豊富であるが、姉の道具として動いている結果である。親からの愛情はしっかり受け止めているが、王室としての観点から外出規制はほぼ無い。姉達からは女王になる目的と思っているが、本人は女王になることなんて全く考えてなく、城と無縁になりたいと考えている。ムラサメとはアスラン王国から帰国の途中に出会い、興味を持つこととなる。

セラフィー・ハイネール
上限年齢：２０歳／１９歳

ヒロイン2人目。フェアリー王国に仕えていたメイドであったが、成績不振により強制解雇となる。行く当てもなく、恐る恐る王へ頼み込みと、ムラサメと行動を共にする事を許される。後にムラサメの奥さんともいえる存在となっていく。現代生活に対する適応力が高くあっという間に、生活から軍事兵器まで使いこなしてしまう。長身であるが、エロティックなスタイルをしている。ムラサメには監禁事件の最中で一目惚れしているが、なかなか気持ちを言い出せずにいる。それのせいか、時々体を張って誘惑をすることもある。

サミー・エンジェル
上限年齢：無し
ヒロイン3人目。女神界異世界転送課所属の天使。前世と異世界を交互に行き来する能力がある。ムラサメの付き人担当となり、異世界へ下りてくる。小柄であるが、男を悩殺してしまう可愛さがある。女神界の住人とは疑い深い趣味を持っており、ムラサメとよく意気投合している。ムラサメにちょっとした恋心を抱いている。現代兵器マニアであり、軍事兵器に目がない。

御簾生拓哉
上限年齢：１８歳／１８歳
ムラサメの親友。テイルズシリーズが好きでたまらないマニアックな奴である。ある半分悪友であるが、かなりの友達思いであり、ムラサメの告別式にはＴＶ泣かせの（無駄な）言葉を放った。異世界で生きていることを知ると、セリフだらけの小説のやり取りを再開している。友人となったきっかけは中学2年の時に、ムラサメがセリフだらけの小説を見たことがきっかけである。テイルズのほか、ガンダム・マクロスＦも好きであるが、基本はテイルズが中心。ちなみにアスベル派である。中学時代はムラサメ以上に虐められていた。アルバイトはＪＲ東日本主導の駅構内掃除（五井－千葉）及び電車内清掃である。月に１４万稼いでいる。

本吉達弘
上限年齢：１８歳／１８歳
ムラサメの親友。拓哉と同じくテイルズシリーズの大ファン。ムラサメとは拓哉を通じて知り合った。ちょっと太っているも大人しい性格である。アルバイトは上総牛久のスーパーで働いているが、小湊鉄道で毎回半分は電車賃で消えている。定期券を検討したが、小湊鉄道がＪＲと協力し、ＳＵＩＣＡの導入により定期券購入をやめる。本人いわく「ＳＵＩＣＡの方が楽」とのこと。ムラサメの生存が確認された後は、異世界の写真をよくムラサメに依頼している。

原光宏
上限年齢：１８歳／１８歳
ムラサメの高校からの友人。修学旅行の前に通っていた中学の話をしあったことがきっかけで友人となる。政治・世界情勢がもの凄く好きで、生まれる前の事件も独自で調べて知識に蓄えている。それが故か、ムラサメを何度も驚かしている。ムラサメの生存が確認された後は、ほっとするが、ハッキング事件が発覚してからはムラサメと何度も連絡を取り世界の情報を伝えている。

シルエ・フォンブラン
上限年齢：２２歳／２０歳
ギルド「魔狩りの剣」の受付嬢。可愛らしい姿でギルドのメンツを釘付けにしているが、後にムラサメをかばったことが原因でギルドをクビとなる。理由は逃走の手助けをしたことである。

※※前世世界の人物※※　今後、登場予定の人物も含む。
ジョージ・Ｗ・ブッシュ
上限年齢：５９歳／５６歳
アメリカ第４４代大統領。ペンタゴンハッキング事件の捜査の中心

人物となり、ムラサメを追う。異世界にいることは言うまでもなく知らず、捕まえることが出来るはずもない。でも、捜査に勤しむのだった。２０１２年の捜査予算は予算の１０％を捜査費に計上しているが為、予算ブレイカーとのあだ名をＢＢＣにつけられた。

バラク・オバマ
上限年齢：４４歳／４４歳
ペンタゴンサイバー課所属の部長であり、捜査指揮の第２の最重要人物。現実のオバマと違って、ヒートアップしやすい。ムラサメの逮捕に執着心が高い。後に携帯端末でハッキングされた事を聞くとオーバーヒートを起こし、３ヵ月程病院で指揮を執ることになる。ムラサメがこの世界にいないことを鋭い予感で見抜いている。

麻生太郎
上限年齢：６８歳／６５歳
第９４代日本国総理大臣。日本最高峰の総理と言われ、連続４代で総理大臣を務めている。党首討論で民主党のＴＶ向け麻生叩きの言葉のごろ合わせに毎回付き合っている。外交面では鋭い感覚を持ち、各国の代表を驚かしている。内政面では様々な規制緩和を行ってい、様々な団体や音楽協会を敵に回しているが、その代わりの法案を持ち出し、納得させている。２００９年に独裁者宣言を行っており、中国や韓国からは第三次世界大戦の引き金を引く総理大臣登場として報道され、全世界を誤解に陥れたが、２ヵ月ちょいで誤解を解いている。独裁宣言以降は基本的に総理が勝手に法案を執行できるが、天皇陛下には必ず同意を得て執行している。在日米軍撤退・日印安全保障条約締結・第４次防衛力整備計画にて日本軍発足宣言・ほか様々な功績を上げている。又、軍事兵器整備計画ではアニメ登場兵器の武装含む実現及び配備を推進。戦闘妖精雪風のＦ／Ａ－２７Ｃの採用・ＲＦ－４Ｊの引き継ぎ機にＦＦＲ－３１ＭＲの採用・Ｆ－１５Ｊ／ＤＪをほぼ全機を有事・訓練用に回し、ＦＦＲ－３１　シ

ルフィードの採用・６１式戦車（ガンダム）の採用・アドミラル５６の採用・イージスシステム独自魔改造・その他軍拡を急激に進めていき極東における軍事バランスの崩壊を招いたが、各国も慣れたせいか批判はない。この計画があってか各作品のファンから絶賛を得ている。麻生総理自身、対ステルス機レーダーの設計に関わっており、領空侵犯したＰＡＫ－ＦＡ、Ｆ－２２、Ｊ－２０を捕捉に成功している。ハッキング事件に関しては、表では全面協力を申し出ているが、裏では保護をするため、うごいている。勿論、保護できるわけがないが・・・

※※東方Ｐｒｏｊｅｃｔ※※　（性格の再現まではしません。てか無理ですｏｒｚ）

四季映姫

上限年齢：不明

閻魔であり楽園最高の裁判長。だが、使えない神のお陰で変わりに村雨の相談役になっている。メールサーバーを共有しており、メールも時々する。最初は閻魔として村雨を見ていたが、徐々に良き友人となっていく。

小野塚小町

上限年齢：不明

映姫の部下で死神でサボり魔。最初は幻想郷で良くサボっていたが、村雨が転移されてからはサボる範囲を拡大している。村雨とは三途の川で知り合っている。時々、隠蔽支援のお礼として前世から色々と”貰って”来ている。

登場人物（ネタバレ注意！）（後書き）

とりあえずここまでにしときます。登場人物はこの後も何人か登場予定ですが、麻生さんだけやりすぎた・・・俺の暮らしてみたい理想の日本をもろ入れてしまったかも・・・

召喚されし兵器（前書き）

家族会議で敬語禁止になりました。

召喚されし兵器

次の朝のことだった。まだ眠たいのにサミーが騒いでいる。それもそうだろう、こんごう型護衛艦が完成したのだ。朝っぱらからハイテンションで正直追いついていけない・・・とゆうかまたやってしまった。誤解するなよ！朝目が覚めたらセラフィーの胸を5もみしていた・・・しかも、服の中まで手を突っ込んで・・・すっごい感触で襲いたくなって来たが、もしもを考えて抑えた。

朝食は納豆だった。セラフィーは臭いに関して文句が聞かれたが、食べた後は完全にはまったらしい。

「村雨君！早くいきましょう！」
「ちょっと慌てるなって！」

引っ張るようにwktkしているサミーである。

「ちょっとサミーちゃん、困っているわよ。」
「おっと、失礼・・・」

少々自分を見失っていたらしい。てか、本当に天使か？いや、マックにいけるぐらいだ・・・天使だろう。

朝食を終え、早速出発しようとするとピンポンと鳴った。ここら辺でピンポンを知っている人といえば・・・

「おはよう＾＾、ムラサメ君。」
「おはようございまいす、フィリア王女！」
「ここでは王女禁止！この前、約束したでしょ！」

「え？あ・・・失礼いたしました！」
「敬語とかの礼儀も禁止！」
「し、しかし！」
「次はどの濡れ衣をきせようかな・・・・・・」
「ゲ！そ、それだけは勘弁してくれ。」
「（ニコ＾＾）」

どうやらこんごう型護衛艦を一目見たくて来たらしい。しかも、護衛なしでここまで来るとは恐れ入った。
みんなが準備を整えたことで、接岸してあった内火艇でこんごうへ向かった。

こんごう型へ乗船すると、サミーはテンションがオーバーヒートしていた。前世で一度だけ乗ろうと試みたことがあるらしいが、見張りに見つかって乗れなかったとか・・・
セラフィーとフィリアは完全に見入っていて、言葉が出でいなかった。

「これがムラサメ君の世界の軍艦・・・材質は木じゃない。」
「ほとんど鋼鉄で出来た艦船てところかもな。この世界ではまだ剣ぐらいにしか使ってないと思うが。」
「この世界では剣か鎧ぐらいにしか使ってないわね。船に使うという発想自体ないと思うんだけどね。」
「とりあえず、詳細はその本に一通り書いてあるから目を通してみて。」

ここで2人はあることにびっくりした。それは・・・紙である。

「こんな高い紙を・・・しかもこんな絵まで載せている！」
「僕の世界じゃ一般的だったからな。ここでは印刷という概念はな

いのか？」
「インサツ？」
「おっと・・・複写といえばいいのかな？」
大体理解できていたようだ。説明どうすればいいんだ？
考えているうちに四季映姫からメールが来た。どうやらｉＰｈｏｎｅでほぼ全ての機能の遠隔操作が出来るらしい。フルで動かすにはリアルに３００人必要とのことだった。とゆうか掌握されていた？
またメールが来たが、昨日夜にゴッドネスビーチにて散歩していたときに造船途中のこんごう型が見えたことで流れを悟ったらしい。
とりあえず、一番気になるＣＩＣび真っ先に足を運んだ。すでに３人ともＣＩＣで釘付けになっていた。次元が違いすぎる！しかも、実物だから制限なしに触れるが、控えておこう。下手してアスロック発射したらアスロック米倉ならぬアスロック村雨になってしまう！
一通り見学を終えるまで４時間はかっかた。その後は５４口径１２７ｍｍ単装連射砲の前でお昼をとることにした。料理はセラフィーとサミーの手作りのパスタであった。
「ああ～この船の攻撃する姿を見てみたいかも！」
「確かにどこまで攻撃力を発揮するか気になるわね。」
「なんなら後で武装のテストをするけどどうだ？」
「いいの！でも、確か３００人くらいじゃないと・・・」
「何故かｉＰｈｏｎｅに遠隔操作が出来る機能があったからそれでな。」
幸い周囲には航行する船舶はなく、テストにうってつけだった。ま

ずは一番気になるＶＬＳ・・・
ターゲットは実体魔法で出した、気球型浮遊ターゲット及び小型駆逐艦とした。

「わくわくしてしまうな。」

ＶＬＳから各ミサイルが発射されると、次に１２７ｍｍを試した。
なかなかの威力を持っていた・・・

最後にＣＩＷＳの試射を行うと、ヴォォォォォォォォ！とかなりでかい音量と共に無数の弾が気球群をめちゃくちゃにしていた。

「駄目だ！なにこの満足感！」

魅せられた４人は内火艇でゴッドネスビーチに戻り、こんごう型の場所について話し合った。その結果、１２００年前に廃止された当時世界最大の港を再利用することとなった。それもゴッドネスビーチの隣にあった。合計２２隻の現代艦が入港が可能であり、内４隻分はニミッツ級とアドミラル・グズネツォフ級及び大和型が入港可能のほか、１隻分オハイオ級が入港可能なドックがあった。
ここまで用意がいいとは非常にびっくりしてしまったが、早速こんごう型を入港させた。

十分すぎると確信した。

そこで村雨は少々欲を出した。それは・・・・・・

数日後のことである、巨大ドックには大和・ニミッツ級・アドミラル・グズネツォフ級・アドミラル５６の姿のほか、キーロフ級の姿があった。空母については艦載機も付属で付いてきており、Ｆ／Ａ

－１８Ｅ／Ｆ、Ｅ－２Ｃ、Ｆ－１４Ｄ、ＳＵ－３３、ＵＨ－６０、ＳＨ－６０、ＡＶ－８Ｂ＋、Ｆ－３５Ｂ／Ｃ、Ｆ／Ａ－２７Ｃが付属でついてきた。既に軍事基地と化してしまったが、幸いにも廃墟と言う事もあり、まず人が来るわけ無かった。半分飾みたいになってしまったが、異世界補正により船体の劣化はない。おまけに航空機にしても点検の必要性は殆どなく、故障もする事はないと映姫から説明を受けている。

ちょっとやりすぎた気がしたが、別に戦争をするわけでもないため、そのまま現状維持とした。

この基地について知っているのは４人のだけだから特に問題はないだろうと思っていたが、そうともいかなかった。

次の日のことである。いきなり城まで呼びだされ、徒歩で向かった。現代兵器をデビューするのは気が早い気がするので・・・・・・城へ行くと兵士が慌てるように門を開け、村雨を玉座まで案内した。ただ事ではないことを確信したが、出来るだけ気軽になるようにした。

「ムラサメ君、ゴッドネスビーチは気に入ってくれたかな？」

「はい。なかなかいいビーチですね。それと勝手ながら廃墟となっていた港も使わせていただきました。」

「フィリアから聞いたよ。１２００年も穴を開けちゃすでに価値観もないからな。改造するなり、解体するなり好きに使っていいぞ。」

「ありがとうございます！」

「それと私の依頼を聞いてくれぬか？」

「なんでしょうか？出来ることならば快く承ります。」

「今日の朝、小型ボートでここから約２００里離れた友好国グレートデビルが望まぬ宣戦布告を受けてしまい、国家存亡の危機にあっているとのことだ。」

「戦争に加担するのですか？」
「いや、要人を保護してくれる人物を探している・・・君に保護を任せたいのだ。」
「え！？保護ですか・・・」
「報酬は倍額だすぞ。ただ、相手が相手で遥か４０００年前に建国された勇者の国とのことだ。」
「勇者？・・・まさか、友好国って魔王ですか？」
「確かに邪悪な魔王・・・それは４０００年前の話だ。今の魔王は強大な魔力は持つものの平和を掲げる３０００年間歴任の王だ。その魔王からの頼みが、娘たちを保護して欲しいとのことだ。」
「戦力的にどうなんですか？」
「かなり不利で持って7日とのことだ・・・」
「了解・・・地図はありますか？その仕事引き受けます。」
「感謝する！ムラサメ君。船舶をすぐに出せるよう手配しておこう。」
「いえ、船は僕が用意します。」
「そうか・・・では、幸運を祈るぞ！ムラサメ君！」

走ってゴッドネスビーチに戻ろうとするが

「北緯５９度５６分　東経１０度４５分・・・明らかに間に合わんな。運よく追い風があったとして8日は掛かるな。それに見せられた武装・・・勇者側はほぼ虐殺ルートだ。こりゃ7日なんて持たないぞ」
一人でぶつぶつ言いながら軍港へ向かうのだった。

救助×魔王×姉妹

ゴッドネスビーチの自宅の隣の納屋に各兵器のシミュレーターを急いで召喚し、昨日の掌握に急いだ。ＳＨ－６０Ｋに関して、全くのちんぷんかんぷんだ。だけど、ここから２００ｋｍもあるからヘリではないと間に合わない。正直、こんな形でヘリを初めて操縦するなんて想像もしなかった。いや、そもそも転生してから今に至るまで殆ど想像できなかった。

＝＝フィリア　ｓｉｄｅ＝＝

王宮でのことであった。村雨が遥か遠く（この世界では１００ｋｍ以上で遥か遠くとなっている）のグレートデビル帝国へ向かう事をこっそり聞いて、ゴッドネスビーチに向かうと思った矢先のこと。

「フィリアちゃん、最近いちゃいちゃしてないかしら？」

「フェリアお姉さま！？」

「聞いたわよ。最近、なんでもムラサメという人物とよく会っていると。」

「それは・・・」

「人に会うのは自由だけど、勝手な真似はしないでちょうだいね。」

「はい・・・」

フェリア・Ｆ・アルフォンス・・・フェアリー王国第１王女で次期国王最有力候補。表はごく普通のお姫様だが、裏の顔はフィリアを道具としか思ってなく腹黒い。彼女の手により、毎回ほぼ１人で村雨の所まで赴く羽目に。

どうやら城を出る回数が増えてきていることで、感づかれたみたいで、ある意味何か企んでいるような顔をしていた。

「そのムラサメていう人・・・好きなんでしょう？」
「え！？なにを言っているのですか！」
「フフフ・・・なに本気にしているのかしら？」
「ムラサメとは・・・唯一の友達です！」
「ふ～ん、友達ね。だったらムラサメの心を貰っちゃおうかな？」
「え？ムラサメを・・・駄目です！」
「やっぱり好きなのね？」
「それとこれとは・・・」
「冗談よ。平民風情を婿にするとでも思った？あなたも相手を選ぶことね。間違っても平民に惚れるなんて王室の恥じよ。」
「う・・・」

正直、答えずらかった。私がムラサメに惚れている？そんなはずはない！
自分にしばらく問いただすフィリアであった。

何れこの城から無縁になって自由に暮らしたい・・・お姉さま方から離れたい・・・

＝＝セラフィー・サミー　ｓｉｄｅ＝＝
２人はリビングで前世世界のテレビを見ていた。

この世界では言語は日本語であり、言葉は問題なかった。だが、文字については別の話となる。カーギットジパング王国はまんま日本語であるが、フェアリー王国・他国では多様な文字で構成されている。当たり前かもしれないが、現代日本に一般的に使われている言葉の中でまだ存在しない言葉も沢山ある。

「そういえばセラフィーてムラサメ君のどこがいいの？」

「急に言われてもね・・・内緒よ。な・い・しょ・・・」
なにとなく恋愛話で盛り上がっていたのであった。
「そういえばムラサメ君・・・何しているのかしら？」
「確かシミュレータっていう機械を使ってヘリコプターの操縦を身に付けているみたい。」
「そういえばグレートデビル帝国の用人の救出を王様から依頼されたみたいよ。」
「確か２００里だから・・・２００ｋｍね。よし！ここは腕を振舞うわ！」
「手伝うわ。」

お弁当を作り始めるのであった。

＝＝ムラサメ　ｓｉｄｅ＝＝
１時間程して何とか操縦方法をマスターした。途中で映姫からも教えてもらいつつ・・・ちょっと待て、なぜヘリの操縦方法を知っている？
それはおいといて早速であるが、１時間後に出発することにした。
あまりゆとりを持っては間に合わなくなってしまう！
ちょっとトレーニングしているうちに１時間がたち、廃墟の港・・・ゴッドネス軍港のニミッツ級からＳＨ－６０を引っ張り出し、出発しようとしていた。
「ちょいと行ってくるわ。」
「気を付けて、勇者側は半分狂っている兵士が多数占めているから。」
「お弁当頑張ったんだから無駄にしないでね！」

「では、行ってきます。」

ヘリを起動させ、北へ向かった・・・

それから1時間後のことであった。

勇者系王国ロトの領海内を飛行していた。グレートデビル王国へのルートとしてはここを通らないと燃料が無駄に消費してしまう為だ。とりあえず、町の周辺だけの飛行は避け、限界高度での飛行で目に付けられずらいルートで飛行していた。

「何故、付いてきたのですか？」

「少々気になりましたので。」

「もしかして心配してくれてます？」

「な・・・い、いえ、ちょっとは心配・・・です。」

個人的に有難い・・・映姫が付いてきてくれたのは。

地形データは映姫が提供してくれた。というか小町が前世からナブスター６５を盗んでこの惑星の衛星軌道に乗せたらしい。動機は分からんが・・・昨日盗んできたらしい。

考えているうちにｉＰｈｏｎｅ（アメリカ合衆国国歌←なぜ！？）が鳴った。

携帯禁止でっせ！という突っ込みは後にして映姫が操縦を代わってくれた。

（（村雨！一大事だぞ！））

（（どうした？原！？））

（（ＧＰＳ衛星のナブスター６５が突然消失！大気圏突入・衛星軌

道離脱認められず！））

おおい・・・当たり前だが大騒ぎとなっていた。

（（ＧＰＳ　３Ａ－１の打ち上げを急遽変更！））

（（へぇ～・・・））

（（例のハッキング事件関与か・・・））

なぜそうなる！ハッキングで衛星の運命を左右させる度胸はねぇよ！

（（すげぇ世の中になったもんだな！））

（（そ、そうだねぇ））↑棒読み

（（どうした？））

（（実はな・・・その衛星なんだが。））

（（まさか！？））

（（僕のいる惑星の衛星軌道にて大絶賛活躍中！間違っても”僕は”盗んではいないからな！活用しているのは否定しないが・・・））

（（まぁ、無理があるな。でもバミューダ海峡真上で消失したからいいんじゃね？））

（（あのなぁ・・・新しいバミューダ伝説登場だな。海峡歴史的に不謹慎かもしれんが。））

（（とりあえず、海峡内を捜索中だとか・・・））

（（なぁ、なんでここまで前世世界と関与せにゃならんの？））

（（さぁ・・・ところでお前ヘリ乗っているだろ？））

（（ご名答！おかげでＧＰＳ使えているんだけどね。ヘリ自体は僕が魔法で召喚した。））

（（魔法いいなぁ・・・と！そろそろ飯だから切るぞ！じゃな！Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ！））

（（おう！じゃあな！））

電話を切ると操縦を交代し、川に沿って飛行した。

「先程はありがとうございます。おかげで助かりました。」

「ちょっとした腕慣らしも兼ねてですから、礼には及びませんよ。」

グレートデビルまで２０ｋｍは切っていた。急ぎだったから余計な燃料を消費してしまった。

左右の地上は映姫が代りに見てくれた。どうやら軍団規模の物体が確認されている。約５０００は視界内にあると言っていたが、さすが中世・・・数は正義だ。

１０分ぐらいしたのち、グレートデビル帝国首都サマナーを目視で確認した。既に城からも煙が上がっていた。地上は人間で埋め尽くされていた。

高高度の飛行に関わらず、ヘリの音に気付いた勇者達がこちらを見ている。

「ムラサメ君、針路５に変更して下さい。２ｋｍ先に丁度いい空けた地があります。高度１０００、速度９８ｋｎｏｔｓ」

いつのまにか副操縦席に座っていた映姫。

「了解！針路５、高度５０００、速度９８ｋｎｏｔｓ！」

教えてもらった地点を目視すると丁度いい着陸地点を確認できた。

その後、少々緊張していたものの上手い具合に着陸が出来た。ＡＲＭＡ２プレイ時のカオスな着陸（ＰＳ３パッド操作）にならなくて良かったぁ～

ヘリ周辺の警戒は映姫にまかせ、サマナー城へ向かった。王による

と裏側に脱出通路があるらしく、そこから侵入し、魔王の娘を保護することとした。

＝＝姉妹　ｓｉｄｅ＝＝
姉：ネリッサ・Ｄ・フェルム
妹：ブランネージュ・Ｄ・フェルム

着陸よりさかのぼって１０分前
サマナー城玉座

「王国を創立して３０００年・・・父上のツケが今になって帰ってくるとは・・・」
「陛下！最終防衛ライン突破されました！」
「ネリッサとブランネージュを裏の脱出経路へ誘導させろ！今の私を娘に見せたくはない。」
「は！」

「いたぞ！魔王ことガーディアル！」
「なぜ勇者はあんな感じになったのだろうか・・・」

と嘆き、自爆魔法を唱えた。その魔法は火薬１万トンに相当した。

サマナー城地下
「今の揺れは？」
「お父様・・・ご冥福をお祈りいたします。」
「陛下が・・・！」
「とにかく脱出が優先よ！」
「は！」
「ブランネージュ！」
「お姉さま・・・」

「悲しんでいる暇はないわ！上手く行けば助けがくるわ！」
お互い励ましつつ脱出口へ向かっていった。
＝＝現時刻＝＝
ようやく出口に差しかかった所であった。前方から放たれた弓が護衛の頭部を打ち抜いていた。
「ひ！」
「ようお譲さん。」
「あなたは！かの１４５０年前にベクタ帝国から略奪を繰り返し、民衆のために戦ったロビン・フッド！」
「よく覚えていたな！この俺こそ勇者界のトップ４。脱出するルートは封鎖させていただきました。命はありませんよ。」
「あなたのような高貴な人が落ちぶれたものね！」
「だってさ・・・あなた達は人間族ではなく魔族ですからね。姫君の血は究極の力があると言われているのでね。ま、私の奴隷になるのでなら生かしておいてもよろしいですよ。た・だ・し、普通の奴隷ではありませんよ。」
「（ここまでなの・・・）」
＝＝脱出口外３００ｍ手前＝＝
村雨は丁度洞窟が目視できる地点まで来たが、同時に監視されていることに気づいていた。
「なるほどな・・・脱出口は侵攻時に封鎖されていたわけだ。通りで道中綺麗だと思ったよ。温暖化の促進かこれ？」
綺麗に並べられた草むらに人がいたのを気づいていた。
「出てこいや。」

チッと声を出した一人の青年と数名の弓兵はそっと草むらから出てきた。

「１３００年を誇る我弓兵団戦術を見破るとはな！」

「丸見えだぜ。ただ草を集めて服の色を同じにして待ちふせ。」

「だけど、ここまで来た以上要件を聞かせてもらおう。」

「な～に、ただ魔王の娘っこを奴隷にしたいだけだ。先客がいたのはびっくりだが。ま、同胞だよ。君たちのね。」

簡単に信じてしまった弓兵団であったが、近づこうとした次の瞬間・・・

森の中ひっそり青年一人を残し全員が屍になっていた。サプレッサーＭＰ７の餌食になったのだ。

「き、きさまぁ！何をした！」

「この武器が見えなかったか？侵略者どもよ。君はこの戦争に疑問は持たぬのか？」

「これは正義の戦争だ！魔王は悪！根絶せねばならぬもの！貴様も同類だ！」

もう一発銃弾を放った。その銃弾は青年の目を潰した。そのまま青年は倒れ、意識を失った。致命傷を外れたことが原因で死には至らなかった。

そのまま洞窟へ走っていたが、目の前には一兵の屍と魔王姉妹と緑服の弓兵の部隊長がいた。

「観念したか！さあ、私のもとへ来るがいい！」

「お姉さま！駄目！」

「（私だって・・・嫌よ！）」

「俺もこれで・・・」

頭部を撃たれロビン・フッドは力尽きる。

「いやあああ！」

屍が倒れてきて驚いたネリッサは死体を急いでどけると目の前には人間が見えていた。

「大丈夫か？」

「はい・・・今のはあなたが？」

「ええ！僕はユウ・ムラサメです！貴女方を保護するためフェアリー王国より派遣されました。」

「フェアリー王国の！？」

「お姉さま、助かるかもしれませんわ！」

「感謝します！私は魔王第一王女ネリッサ・D・フィルム、こちらは第2王女ブランネージュです。」

「よろしくね！」

「ブランネージュ！いきなり友人気分で話しかけるのは！」

「別に大丈夫ですよ。むしろ敬語より普通に話しかけられた方が気楽になれますから。」

「な、なら私も・・・・・よ、よ、よ、よろしく・・・」

敬語以外を他人に使うのは不慣れであった為か、もの凄く声が震えている。

「お姉さま、緊張しすぎよ。気軽にいきましょ！」

「う・・・」

顔を真っ赤にしたネリッサ・・・萌える！

馴染んでしまったが、脱出口の奥から多数の兵士の怒号が聞こえてきた。

「ついついしゃべり過ぎたか！すぐに逃げるぞ！」

「「はい！」」

２人は活気を取り戻し、村雨に案内されつつある場所へ向かった。

だが、途中で遠距離から放たれた矢が村雨の肩にＨＩＴした。

「ぐあ・・・い、いてぇ！」

「大丈夫！？ブランネージュ！」

「このぐらいは問題ないわ！ヒーリングナース！」

ブランネージュからの魔法は回復魔法初等級でケアルに相当した。

その傷はすぐに癒され、矢も勝手に抜けた。

「すまない！」

「このぐらいはお安い御用よ！」

また数百メートル走ると２人には見たこともない物体・・・ヘリコプターの姿があった。

「これは？」

「ヘリコプターだ。」

「ヘリコプター？」

「あ・・・そうだった。えっとだな・・・空を飛ぶ機械。」

「キカイ？」

「（解説できないｏｒｚ）乗ればわかるさ！」

すぐに乗るも、そのほとんどを知るわけもなくいそいで解説を急いだ。映姫も一緒に協力してくれたおかげでスムーズにできた。

「えっと、ムラサメさん・・・ち、近い／／／」

「な／／／！・・・悪い！」

シートベルトを着けるのにちょっと近すぎてしまっていた。

「ちょっと苦しいかも・・・」

「大丈夫！すぐ慣れるさ！映姫さん、ドアを閉めてください！」

スライド式であったが姉妹両方ともスライド式にびっくりしていた。ドアを閉めヘリを機動する。

「な、なんの音！？」

「ローター音だ。外に出たり、ドアを開けていると物凄く煩いぞ！」

「村雨君、前方に敵が見えるわ！」

「ええい！離陸だぁ！」

無駄に弾薬などを詰め込んだ結果、機体の重量に響いていた。ちなみに武装はなし・・・こうなる結果は見えてなかった・・・てっきり簡単な任務だと浮かれてたのだった。

風圧に耐えられない勇者兵士は動けない状態であった。そのままＳＨ－６０は飛び立ち、フェアリー王国へ針路をとった。急ぐ必要はないため、巡航速度で向かうのでった。燃料も考えればな・・・無茶をしすぎた結果であるが、燃料がギリギリしかない。

「お姉ちゃんすごいよ！」

「はしゃぎすぎよ！確かにすごいけど・・・」

騒いでいる2人を後にして・・・

「映姫さん、感謝します。でも裁判長としての仕事は大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。昨日偶然にも秋葉原で小町を捕まえて罰として仕事をさせているので。」

「鬼ですな～。」

「フフフ・・・あのサボり魔には制裁を下さないとわかってくれませんからね。」

「後ろの二人は興奮中ですな。」

「村雨君はハーレムを目指していたりします？」

「んな！いきなり何を！」

「お近づきの女性の方々は貴方を気に入っている様子がうかがえましたので。」

「そんなことはないと思いますよ。前世ではめちゃくちゃ避けられておりましたし。毎回『きもい』との言葉を残していくくらいですから。」

「この世界とあの世界の基準は違いますから気にしない方がいいですよ＾＾」

「そうゆうもんですかね？」

「そうゆうものですよ。私が貴方のお嫁さんになってもいいのですよ？ここでキスでもしていただければ。」

「えええええええ！？ちょっとそれは！身分が違うといいますか・・・その次元が違うといいますか・・・なんというかぁ！」

「冗談ですよ＾＾」

「（スーパーデリシャスゴージャスグレートワンダフル分かりずれぇ！）」

よくよく考えればそうだよなぁ。本気だったらここで言わないか・・

・本当に閻魔なのか？

考えつつ洋上に出ると

「うわぁ～綺麗。」

「確かに綺麗！あそこには浜辺までしか行けなかったからね。」

「行きの時は見る時間はなかったけど、グアム以上に綺麗だ。いつか海水浴で行きたいな。」

「カイスイヨクて何？」

「（そうだった・・・）海で遊ぶといえば分かるかな？」

「なるほど！」

「映姫さん、あとどれほどで？」

「約２時間ですね。」

「了解！」

このまま南西へ向かうのであった。

この事件はロト王国では問題となっていた。軍属の画家のスケッチは鮮明であり、脱出時のヘリコプターも鮮明に詳細に描かれていた。だが、何より恐れたのは魔王姉妹を取り逃したことである。勇者たちは復讐されるのが恐ろしかった。姉妹討伐の為、外洋へ進出を決めた勇者共。その中に片目の青年もいた。

公開されし青年（前書き）

救出事件から3日後のこと

公開されし青年

インターポールではペンタゴンハッキング事件捜査の為、各警察機関の無制限の渡航を許すこととした。ペンタゴンの情報の中には約２０００ｋｍも吹き飛ばす核兵器にニューヨークを丸のみにする無誘導爆弾の情報が隠されていた。ブッシュ大統領は村雨に国家予算１０％を報酬金と出すことを発表し、同時にこの２つの爆弾の情報を公開した。強い批判が降りかかったが、ブッシュのジョークパフォーマンスで凌いだ。日本へＣＩＡ・ＦＢＩ・ＮＳＡを全国へ派遣し、捜査にあたらせているが地元警察に舐められぱなっし。

ロシアではＫＧＢが動いていた。頻繁に日本へ密入国・堂々と入国しようとするも失敗続き・・・諜報活動がヘタレになっていた。

ＥＵでは日本へ特殊な捜査機関とマルセイユの暴走ＴＡＸＩ屋とマルセイユ警察のアホ共を送り込んだ。行動範囲は限られていて関東地域のみしか捜査が出来なく涙目になっていた。首都高では暴走ＴＡＸＩに悲鳴を上げている警察とお客さんがいた。

共通して言えたことは・・・「麻生太郎首相め！」

（（Ｍｒ．麻生、貴国のハッカー・ムラサメには恐れを行ったよ。））

（（我が国にもいい人材が出来たものですよ。））

（（即刻身柄を引き渡してもらいたい。我が国とていつまでも甘い態度はとれんのだよ。））

（（何度もおっしゃっている通り、日本国内にいないのは判明しております。恐らく日本国へ逃走したかと思います。））

（（呑気なものだな。国交断絶も視野に入れたいぐらいだ。戦争をしてもいいんだけどな。））
（（我が国の軍事力を甘く見ないでいただけたい。））
（（所詮、アニメや漫画の兵器を実際に兵器にした程度だろう？））
（（ブッシュ大統領よ、先月の日米韓軍事演習をお忘れになりましたか？模擬戦闘にて第７艦隊全滅・韓国海軍壊滅は最高の結果でしたよ。））
（（海軍の総攻撃には耐えられんよ。））
（（そうかな？））

会話が変な方向へ向かったが、ここで国連出席の義務が生じ、急遽３週間後に行くこととなった。

夜、首相はある一人の大学生へ電話を掛けた。

（（今夜、全世界へ向けて発表しますので準備の方をお願いします。））
（（了解。））

その夜、意外な所に麻生首相の姿があった。

「準備が出来が出来次第始めさせて頂きます。エリネさん、ご安心してください。」
「はい。」

広場には全世界のマスコミ・各国の首脳陣が来席していた。

「私は、日本国独裁首相の麻生太郎です。本日は世界の皆様方に重

大なお知らせがあります。各国のテレビでは日本政府が保護しているとの噂を流しておりますが、全くのデマと断言いたします。そして今日はスーパーハッカーこと雄村雨の所在を公表する為、皆様をお呼びしました。」

この言葉にどれほど待っていただろうか、各国の首脳陣は期待を膨らましていた。アメリカはレインボーブリッジ手前にオハイオ級を待機させてあったが、待機１０分後に護衛艦たかなみに新型ソナーの的にされ降伏していた。ロシアもタイフーン級を待機させ、巡航ミサイルの発車準備を整えてあったが、原子力潜水艦やまとの特殊部隊が船体に穴をあけて鹵獲していた。

「ただし、わたしの言う事を信じるか信じないかは貴方方次第です。恐らく理解出来ない方々もいるのではないかと思います。では、現在よりＭＳＮ用いて村雨君の所在を本人から公表してもらいます。これは本人の意向でもあります。」

しーんとするなかＭＳＮで呼び出しをしていた。

ざわざわ・・・ざわざわ・・・ざわざわ・・・ざわざわ
ざわ・・・ざわ・・・

そして繋がるとどことも変わり無いリビングが映し出されていた。

各国のマスコミは唾を飲み、日本のマスゴミは早速麻生叩きの準備をした。民主党もヘタレ討論の準備をしていたが間もなく意味がない事になった。画面に青年の姿が映ったのであった。

（（遅れて申し訳ありません。スーパーハッカーこと雄村雨です。））

ニコニコ動画（原宿）でも生放送が行われており、４５０万の同時視聴を記録した。

（（まず、僕のハックにより全世界の皆様方へ大変なご迷惑をお掛けしてしまったことを深くお詫び申し上げます。同時に僕の所在を公表いたします。まず、今から転送する写真をご覧ください。））

送られた写真はサウスフィルン村、巨大ワームの死体、フェアリー王国首都城門、フェアリー城、ゴッドネスビーチ等ほか多数の写真がおくえられた。現地の民も混ざっていた。無論、誰も信じることなく各国のマスコミは文句をだだ漏れし、日本のマスゴミは早速生放送で麻生・村雨叩きを始めた。だが、ＥＵ諸国は険しい目をしていた。建築物はほぼヨーロッパであったが誰もこんな地形は見たこともなく、こんな都市は存在するはずがないのだ。

（（こうなると予測しておりましたので、ゲストをお呼びいたしました。））

一人の美少女と席を交代する。

（（初めまして、私はフェアリー王国第３王女フィリア・Ｆ・アルフォンスといいます。信じてくれるとは思いませんが、ムラサメが言っていたことは事実です。））

突然出て来た美少女に騒然をしてしまうが、　さらに驚いたのは２人の美少女の登場であった。

（（失礼します。グレートデビル王国第１王女ネリッサです。））

（（同じく第二王女ブランネージュです。））

長い耳に青い長髪の姉に耳が長く銀色の妹。まだ信じていなかった

為、耳を引っ張る等して証明したが、それでも信じてもらえず、魔法と言う手段に出た。これ以上のパフォーマンスでは信じられざる状況になり、首脳陣は逮捕することが出来ないことを悟った。

それからしばらく村雨との対談が続いた。
マスコミタイムになると海外のマスコミを優先させた。
日本のマスゴミタイムになると案の定煽られまくりだった。だが、この事がきっかけでマスゴミに対する評判が最悪になりマスコミに対する規制が強化されることとなった。

４時間後、閉会することとなった。後は家族・友人タイムであった。

（（村雨、むこうにいっても変わらんのな。））　－拓哉
（（何週間ぶりだろうな？））　－村雨
（（さぁな。））　－拓哉
（（ねえ、村雨君。そっちに行って問題なかった？））　－エリネ
（（大丈夫、特に困ってはいないよ・・・））　－村雨
（（ねぇ、一つだけ変な事を聞いてもいい？））　－エリーゼ
（（ん？））　－村雨
（（その世界で人を殺した？））　－エリーゼ

全員が！！！な感じになり村雨は黙り込んでしまう。何故そのように行ったのかは、背後にＦＡ－ＭＡＳ　Ｇ２が置いてあったのに気付いたのだ。

（（・・・・・・））　－村雨
（（隠さないで！））　－エリーゼ
（（・・・殺した・・・））　－村雨
（（なぜ、殺したの？））　－エリーゼ
（（は～い！ここは私から説明しますわ！））　－ブランネージュ

ここでブランネージュに代わり代弁してくれた。これに皆は納得したらしい・・・

（（村雨兄さん。例え何をしようが兄さんは兄さんよ！血が繋がっていなかったとしても！））　－エリーゼ

（（エリーゼ・・・））　－村雨

（（俺だって友達だぜ！））　－拓哉

（（私も村雨君が生きていてくれるだけでいいわ。））　－エリネ

（（皆・・・有難うな！））　－村雨

（（それにしてもいい女いるじゃねぇか！お前メシウマだな！））

－拓哉

（（それゆうな！））　－村雨

爆笑ムードに包まれていったが、もう時間も遅くなっていた。

（（とりあえず、僕のＰＣにＳｋｙｐｅがあった筈だから。時折よろしくな！））　－村雨

（（ええ。エロゲーも大切に保存しておいてあげるからね！））

（（ありが・・・え？））　－村雨

（（あら？義姉と義妹に隠せると思った？））　－エリネ

（（Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ！））　－拓哉

（（じゃ、じゃあな！又今度！））

顔を真っ赤にしながら電源を切った。

魔王姉妹の新しい場所（前書き）

いい加減すぎたかもです。――反省――

魔王姉妹の新しい場所

3日前、、、

すっかり夜になっていた。ゴッドネス軍港の夜のニミッツ級は綺麗だった。2人は既に軍港と艦船から放たれている光に感動し見入っていた。電気という概念がない世界では・・・

着艦後、直ちに移動を始めた。フィリアが丁度馬車を用意してくれたおかげで、事はスムーズに運び一行は王座へ

「ムラサメ君、よくやってくれた。」

「僕はこれで失礼いたします。」

王座を出ると兵士に応接室へ案内された。誰が呼んでいるのかは言ってはいなかったが、誰なんだろう？

そのまま応接室へ行くと、見慣れぬ王女と思わしき女性がいた。

「ムラサメ君ですわね？私はフェアリー王国第1王女フェリアよ。少し話がしたくてね。」

「話とは？」

「フィリアとはどういう関係かしら？」

「友人と感じております。」

「そう・・・いいわ。もう下がって良し！」

「は！失礼しました！」

少々つまらなそうな顔をしていたが、何を望んでいたかは全くの不明であった。ただ、寒気と嫌な雰囲気を感じた。

城門を出ようとした矢先、兵士に呼び止められ再び王座に戻ることとなった。また依頼かと思いきや、魔王姉妹２人と一緒に住め！と命令された。やけに命令口調だ。

「えええええええええええ！」

と叫ばずにはいられなかった。トップレベルの御姫様２名を庶民の家で暮らすなんて聞いたことないぞ。いや、待て待て待て！そもそも何故我が家で住むことになったのだ！

「勇者一行がこの大陸へ向かってきているとの連絡が伝書鳥より入ったのだ。王国の保護ではすぐにばれてしまうからな。前金の１０００Ｒだ。」

「はぁ、、、」

そうして家へ招いたが、セラフィーが家の機能の殆どを解説してくれた。

「異世界から来たなんて不思議だわ。」

「こうゆうものがあって、あんな武器があって・・・」

大騒動は３日ほどで終わったが、新たな問題が待っていた。ｉＰｈｏｎｅ（ヤマダ電機／ＢＧＭ）が鳴り、電話に出ると驚く人物であった。

（（日本国総理の麻生太郎です。初めまして、村雨君。））

（（へ？あ、麻生総理大臣！？））

思わず大声をあげてしまうが、気を取り直して。

（（そ、総理大臣殿が僕になにかようでしょうか？））
（（ハッキング事件の犯人として世界から手配書が出回っているのはご存知かな？））
（（はい・・・））
（（別に君を捕まえようってわけではないのだけど、場所だけでも公表してはいかがか？））
（（公表しても・・・））
（（君は日本でも世界でもなく、我々とは違う世界に居るといるから信じる筈がない。とお考えで？））
（（それを何処で！？））
（（勝手ながら友人と電話してすらすらと話してくれたおかげでね。））
（（了解しました。））
（（明後日、ＭＳＮを用いて公表するからそれまでに用意をしといてね。））

それからしばらく話が続き電話を切る。居場所の公表については信じるかどうか不安であったが、ここは姉妹とフィリアに助けを貰う事にした。幸いにも、フィリアは明後日は超暇だとかで１日居ると宣言するくらいだった。

この２日間は問題なく過ごせており、ゴッドネス港に誰も近づいた形跡はない。むしろ近づかないのだろう。
ほとんどを引きこもりのごとくゴッドネスより郊外へ出てはいなかったし、必要機器は実体魔法で出した。
ネリッサもブランネージュもサブカルチャーで暇を潰していた。

とりあえず、全世界の公開は端折る・・・・・・

宣戦布告なき開戦

フェアリー王国フェレナール第６貿易港　西暦４３０１年５月３３日　１４：００
現世界で第４に巨大な港であり、最も盛んな貿易が行われていた。ここから様々ギルドが出入りしており、第２の故郷として名も高かった。ただ、防衛に関しては最も薄く、兵士も１００人未満しかいなかった。ギルド「赤い傭兵団」が港の防衛の一部をまかなっていた。
今日も平和であった港のはずであった。

「ようヨネイデル、今日も平和だな。」
「そうだな。ま、フェアリー王国自体戦争はあまり行わないからな。」
「この後、暇だろ？フェレナール第１商業区の酒場に行こうぜ。あそこの姉ちゃんと一発やろうぜ！」
「いいぜ！今夜はお楽しみだな。」

何気ない兵士の会話であったが、地平線の向こうに大船団と思わしき艦影を目視した。

「ほぉ・・・最近はちっこい貿易船だらけだと思ったが、あんな巨大な貿易船も珍しいな。」
「ふむふむ・・・あれはアストロ第３帝国の貿易船・・・なのか？」
「なのかって？」
「貿易船にしては随分と構造がおかしいぞ。」
「とゆうかお前の持っているそれって最新の望遠鏡じゃないか！」
「後で貸してやるよと・・・何隻か接近してくるな。」
「いやな予感がするぞ。」

「同感だ。あんな貿易船は見たことが無いぞ。甲板が広すぎるし・・・最近起こった戦争は？」
「確か・・・アスラン王国とアストロ帝国が開戦したのは聞いた。」
「只事じゃない予感がするぞ。他の見張りに知らせて警戒しよう。」

いかにも怪しい貿易船団は徐々に近づいて来ていた。距離が１００に迫った時、兵士は悟った。

「あれは・・・全兵士！全市民に避難警邏鳴らせ！敵は・・・アストロ帝国軍だ！」

町全体に警邏が鳴り響き市民は戸惑い逃げ惑う。それに乗じたアストロ軍は次々と上陸していった。
フェアリー王国軍兵士は直ちに徹底抗戦するが、数で負けていた。

「これが噂のケフカ式魔道複製兵士！帝国魔術王ケフカにより召喚される鎧兵士！」

魔術王ケフカ・・・正式名はケフカ・Ａ・ガラスト。アストロ帝国魔術師にして世界最強の魔道を操る。召喚される魔道複製兵士は人間の知能を持ち、人間並みに行動が出来る鎧兵士。中身は空であるが、重鎧で軽々と行動が出来る。１日に５０００体は召喚可能であり制御距離は無限。ただし、弱点は人間と変わらない。致命傷であれば即戦闘不能になる。アストロ王国では毎月２万の兵士を召喚している。腕はルーキーとベテランの間。成長もする為、各諸国から恐れられている。この世界自体魔道複製兵士自体はどの国でもあるが、毎日１００体程が限界である。フェアリー王国は毎月２００体召喚しているが、現在は倉庫がない為、中止している。

「我が軍の魔道兵士では・・・到底叶わぬか。」

「魔術小隊は接近する敵のみを排除し船を焼け！」
「りょ・・・」
魔術師５人は背後より巨大なブレードで首を切られてしまっていた。
「赤い傭兵団！裏切りだと！？」
突如として赤い傭兵団は裏切った。傭兵共は次々とフェアリー兵士を斬っていき反撃する兵士もあっさりと斬っていく。
「クソォ・・・なんでこの港に！」
「隊長！これ以上は持ちません！王のもとへ！」
「しかし住民が！」
「ここは我々が死守します！私に隊長の資格があるかためさせて下さい！」
「グルデン・・・生きろよ！」
「隊長こそ！幸運を祈ります！」
隊長はそのまま首都へ猛ダッシュで向かった。その部下は隊長を見守りつつ２つの敵を睨みつけ４０人の同僚と共に立ち向かい、玉砕した。
フェレナール城では、、、
「王様！第６貿易港の一大事です！」
「どうした！？」
「アストロ軍に奇襲され兵士は全滅！市民１万人が虐殺とのこと！」
「生き残りは！？」
「兵士３名と市民３名です。」
「アストロ軍め！最近、体制が変ったと聞いたが侵略とはな！しか

も宣戦布告無き・・・」
「陛下・・・奪還を進言します！」
「無理だ。」
「陛下！ここで奪還をしないと我が国の財政が圧迫を・・・」
「相手はキングダム皇帝とケフカ魔術王だぞ。弱腰に見えるが残念ながらこうするしかない。」

ゴッドネスビーチでは
村雨家第２シミュレータルームにて村雨はちょっとした欲の為、Ｆ－３５Ｂの操縦訓練を行っていた。何処とぞとなく出現した八雲紫に教わりつつ・・・何故操縦方法をしっているかは不明である。それ以前にまだ何処も配備されてないんだけどなぁ。

セラフィーは戦艦大和を隅々まで見学中でサミーはＦ／Ａ－１８Ｆの操縦訓練を行っている。ネリッサとブランネージュは護身射撃訓練を行っている。どうやらＭ９２Ｆを気に行ったらしい。フィリアは村雨の傍で操縦訓練の見学をしている。

こんな感じで本日を過ごしていた。フィリアが一旦、城に戻る前にグロックの訓練を勧めた。以前から銃に興味があったようで、護身用に持ちたいとのことだった。
少し時間を頂き銃の訓練を行った。反動でビックリしてばかりいたが、徐々にな　慣れてきてなんとか５０ｍ先の的に当てられるようになった。もう５分撃ち続けていたら、反動を抑えることが容易くなり、１００ｍ先のターゲットも軽々と撃ち抜けるようになった。
後々、知ったのだがこの惑星の人々は適応化がはやいとのことだ。
別れ際にグロック１７とマガジンを９つ渡した。

フェレナール城

「フィリアは！？」
「村雨の所へ行ったきりです。そろそろ戻ってくるかと。」
「わしとして堂々と負ける訳にはいかん！」
「報告！第１から第８貿易港閉鎖されました！」
「全滅か　・・・・・・」
「王様！首都近辺にアストロ軍大部隊が展開！数は２０００万かと！？」
「総戦力で打って出ろ！民を裏門から避難させろ！時間を稼げ！」
「了解しました！」
「メイド長！」
「は！」
「市民と共に王国を脱出しろ！多勢に無勢だ。少なくとも船は足りるだろう。」
「フィリア様に関しては！？」
「君が合流しろ。」
「陛下はどうするのですか！？」
「民全員の脱出が確認出来たら私も続く！どうせ前線に出しているのは魔道複製兵士だ。」

物量の前に首都放棄を決定した王であった。逃亡先は北西のフェアリー王国の隠された領土ケセド島であった。約２４００ｋｍもの先にあり、食糧不足などの不安があった。

＝＝フィリア　ｓｉｄｅ＝＝　　１５分後
まだ何も知らないフィリアであった。たまたま海岸沿いをあるいていたためか、妙な胸騒ぎを感じていた。
「あれは最近完成した大型帆船！？」
前方よりメイド長が近づいて来て状況を知った。

「王国が・・・」
「残念ながら我々には手に負えない事態になりました。アストロ軍は物量を持って我が王国を支配してくる手段に出てきました。」
「ク・・・」

目的地より反転してダッシュでゴッドネスビーチへ戻るルートを取った。脳裏にはムラサメに知らせねばとの考えで一杯だった。

「フィリア様！まもなく船が出航します！」
「ムラサメのところへ行かないと！」
「ですが！・・・ミネレスト、王様にフィリア様は別行動をとると伝えよ！」
「了解しました。ケセドにてお待ちしております！」

メイド長はフィリアと同じ行動をとることにした。

＝＝ムラサメ　ｓｉｄｅ＝＝　５分後
アストロ軍の情報は既に耳に入っていたが、戦争になっているとは分からなかった

チャイムが鳴り、ドアを開けると顔を真っ赤にしたフィリアと周りに見入っているメイド長がいた。

「フィリア！？・・・さん、一体何が？」
「アストロ軍が・・・フェレナールまで迫ってきて・・・」
「せ・・・戦争！？」
「いわゆる宣戦布告なき戦争です。ユリシーズ協定（戦争に関する協定）に反する行為です。」
「すぐに逃げないと！」

「おいおい・・・（せっかく落ち着いたのに。）」
「村雨君、ちょっとまずいかもよ。」
「相手の数は？場合によっては・・・」
「約２０００万です。」
「２０００万！？２０００の間違いでは？」
「いえ、事実です。」
「サウスフィルン村は！？」
「別の道にて合流予定です。しかし、我々が逃げるための手段は・・・」
「いいえ、彼なら大丈夫よ。メイド長こと第２１龍騎兵団団長マリュー・ラミアス！」
「（マ・・・マリュー艦長！？やけに容姿が似ていると思ったが・・・）」

メイド長はまんまガンダムＳＥＥＤのマリュー艦長であった。ムラサメにはコスプレに見えてしまったがここの世界の住民である。

「フィリア様？」
「ムラサメ君！」
「了解だ！」

全員が身支度を整えた所で、ハンビー（Ｍ２機関銃搭載）を召喚した。

「これは！？」

思わず軍用車両に驚くメイド長であるが、解説している暇はなかった。助手席にはセラフィーが座り、ＦＡＭＡＳ－Ｇ２（ドットサイト）を構えており、後部では旅行用キャリーバッグを縦にＭ２４９（Ｍｋ．４８）を姉妹で構えている。Ｍ２機関銃はサミーが担当し、

２人にはドライブを楽しんでもらうとしよう。
とっとと周りにあった召喚物をｉＰｈｏｎｅにデータ化し、ついでに雪風で使われたダミーデータを設置した。時間稼ぎには十分すぎるだろう。跡形もないことを確認したらすぐに次の行動へ移った。車を起動し、ゴッドネス港へ向かった。映姫の計らいで暇を持て余した妖精達が操艦してくれるとのことだった。
ちなみにマリューは「？」でいっぱいだった。頭から？が出てきそうだ・・・

「来たわ！騎兵が数百程向かって来ているわ！」
「姉妹の射撃能力は伊達じゃないわよ！」

姉妹とサミーはアストロ騎馬部隊へ集中砲火にて制圧した。
数分後には港へ到着し、こんごう型に乗艦した。荷物はキーロフ級に搭載し、直ちに出航した。１０分での出向はさすがだなとは思った。ちなみに調子に乗って召喚していた結果、港は満杯になっていた。２２隻の艦隊は大海原へ出航した。

ＣＩＣでは・・・

「フィリア、行先は分かるか？」
「いえ・・・」
「我々はケセド島へ向かうとのことです。」
「座標！」
「ここからかなり先のようです。データが無い為、航空機を用いて偵察するしかありません。」
「衛星は？」
「この大陸の解析で手がいっぱいです。少なくとも１週間はかかると思われます。」

どこで訓練したんだ？妖精たちは。

艦橋に出ると少しの間世話になった大陸が遠ざかるのを確認した。そこで、座乗しているこんごう型は単独行動をとった。数百キロ先の大陸に沿ってちょっとした冒険をしたい為だ。

＞＞ＣＩＣより艦橋＜＜
＞＞こちら艦橋、どうぞ＜＜
＞＞航空母艦より発艦したＥ－２Ｃ”ブラックアイ”より市民全員の脱出が確認されたとのことです。＜＜
＞＞そうか、御苦労。＜＜

「ムラサメさん、この船はどちらへ向かわれるので？」
「ちょっと大陸沿いを航海するのみです。」
「あの未知の大陸へ？」
「そうなりますかな。」

艦隊から分かれたこんごう型は北西へ針路をとった。未開の地を求めて・・・

未知の大陸（前書き）

航海の途中で艦名がないことに気になった村雨は全２２隻全ての艦に名前を付けた。

軍精・・・神界で軍事訓練を受けた幻想郷の雑魚妖精。主に人類発軍事兵器のエキスパートであり、軍服もアメリカ軍２０１０年式。戦争関係が専門で当初の目的は幻想郷での事変を想定して組織された。死ぬと神界にて蘇り再び戦線に戻ることが可能。今回の件では村雨の旅の補佐として数千名が送られた。

未知の大陸

ゴッドネスビーチより３００ｋｍ、こんごう型護衛艦「秋月」　２２：３０

未知の大陸へ向かいつつあった一向、一方の王国船団は艦隊が目視外の場所から随伴していた。ちなみにフィリアとマリューからは許可をもらっており、マリューとは敬語不要の仲になった。

他は寝室へ行ったが、マリューと村雨はブリッジにいた。

「ゼロ大陸？」

「ええ、通称”呪われし大陸”。”ゼロ”との関連性は分からないけどね。」

ゼロ大陸・・・未だに足を踏み入れたものがいない大陸である。この大陸に近づいた船は嵐に曝されることが頻繁に起こり、誰も近づかなかった。過去１年に渡り開拓船団を派遣したが、度々嵐に遭い失敗に終わっている。現地民からは天災と恐れられているが、実質は”たまたま”嵐が通っただけである。

「嵐ばっかり発生して開拓失敗か・・・嵐の的中率おかしいな。」

「でも、嵐多発の海をあっさり越えるなんてね。予想外だったわ。」

「この船では気象観測も行っているからな。嵐は発生の報告はないから大丈夫だろう。」

気温は現在９℃と低くなっている。マリューは寝室へ戻り、村雨は司令席にて真っ黒な外を眺めていたが、気づいた時には眠っていた。次に起きたのは朝４：３０であった。誰かが掛け物をかけてくれた

らしい。周りを見ると違う軍精に代わっていた程度で、特に変わりはなかった。

「方位に問題はなしっと・・・あ、おはようございます。」

「おはよう。」

ちょっとした何気ない挨拶であったが、特にすることもなく艦長室にてゼロの使い魔（１期）でも見ていた。

朝食はいちごジャムのサンドイッチでこれがまたおいしかった。

再び艦橋へ戻ると、とっさに軍精が慌て始めた。

「左前方距離３０００に艦船を目視！予想速度２０ｋｎｔ！」

「現地民か！？」

双眼鏡を手に取り、国籍不明の艦を目視すると驚くことにゼロの使い魔の世界の飛行戦艦のままであった。

「おいおいおいおい、マジかよ・・・今、ＤＶＤで・・・」

「どうしますか？」

「様子見で行く。もし妙な動きがあれば知らせてくれ。」

「了解！」

そのままｉＰｈｏｎｅを開き、航路を確認した。本来の予定では島周辺を１週した後、適度な浜辺から上陸することだった。あまり艦を見られたくないことも事実であり、接触は出来るだけ回避したいと思っていた。だが、それは叶わなかった。

「飛行戦艦、前方－２０度にて着水！分解されていくのが見えます。

」
「何故こうなった！・・・これより救助へ向かう。最大戦速！」
「最大戦速！」

こうなってしまっては助けないわけにもいかなくなっていた。フルスピードで着水地点へ向かった。

着水地点では多数の木材が浮かんでおり、しがみついている兵士も多く見えた。
徐々に接近していくのにつれ、兵士たちは秋月に気付き目を丸くしていた。当り前か・・・

直ぐに艦を停止し、フル動員で救出に当たった。ＳＨ－６０Ｋは出来れば見せたくはなかったが、人数的に１００人は超えており、格納庫を保護スペースにするのにもってこいだった。その為、ＳＨ－６０Ｋは後部甲板に出しておくことにした。
天気も曇り・・・スコールの予兆があった。

「あれの雨量グアムの２倍あるな。救出作業早めろ！」

次々と乗艦してくる兵士は軍精に案内されつつ格納庫へ案内された。そこで見た後部甲板に固定されていたＳＨ－６０Ｋに見入ってもいた。とゆうか見入るものばかりであった。

全ての兵士が救出が終わった頃に、スコールが来ていた。後部ハッチを閉鎖し、様子を見に行った。どの兵士からもこの艦に関する話声でいっぱいだった。その内、一人の女性が挨拶に来てくれた。

「先程は助けていただき感謝の言葉もございません。」
「いえ、当然の事をしたまでです。僕は艦長の村雨です。貴国まで

送ります。」
「感謝します。私はトリスティン王国女王のアンリエッタです。」
「よろ・・・（聞き間違い？ト、トリスティン？王女？ア、ア、アンリエッタ！？）」
「私の顔に何か？」
「い、いえ！乗り心地に関しては期待は出来ないと思いますがご了承ください。」
「大丈夫ですよ・・・というよりこのような軍艦は初めて見ました。どこの国の所属ですか？」
「今の所、無所属です。今後とも何処かの軍にも所属する考えはありません。」
「もし宜しければ艦内を案内して貰ってもよろしいですか？」
「構いませんよ。」

アンリエッタ女王に艦内を案内する事になったが、複雑すぎる艦内に加え、角度が急な階段に疲れ切っていたが、ＣＩＣに入るとその疲れも一気に取れることになった。

「これは・・・」
「驚きましたか？（普通に驚くか・・・）」
「はい、見たこともありません。これは何かの魔法ですか？」
「いえ、魔法ではありません。先ほど紹介した電気と同じ感じです。」
「そうなんですか。」

しばらく見学している後、１人の軍精が近づいてきた。砲雷長であった。

「村雨艦長、各武装システムに異常はないのですが、１２７ｍｍの試射の許可を下さい。」

「急にどうした？」
「１２７ｍｍの雨天内射撃の場合の弾道を計算したいのです。我々とて神界にてアーレイバーグ級モデルのシミュレーターにて訓練を受けておりますが、常に晴れという状況下でした。訓練を兼ねて射撃を行いたいのですが・・・」
「予定としては何発撃つ？」
「５発です。」
「良し、許可しよう。」
「感謝します。１２７ｍｍ砲起動し、目標を７００ｍ先の海にする。」

１２７ｍｍ砲の試射を許可した村雨であったが、１つの思惑があった。有る意味武装を見せたい意思があった。

「アンリエッタ女王、艦橋までよろしいですか？」
「カンキョウ？は、はい。」

艦橋に向かう途中でアンリエッタはある文字に気付いた。

「ムラサメさん、この文字は何処の文字ですか？」
「日本です。書いてあるのは平成２３年８月２２日です。（その日に点検でもしたのかな？）」
「ニホン・・・聞いたことがない地名ですね。それは何処にある国ですか？」
「ええとですね・・・異世界と言えばいいでしょうか？」
「やはり貴方も異世界からですね！王国にも１人、異世界から来た人がいるんです。」
「以外が耳寄り情報ですな。（予感はしていたが、ここまでとは・・・）」
ということで再び艦橋へあるき出し、顔を出した頃にはまだ豪雨が

続いていたが視界は１２７ｍｍが艦橋から見える程度であった。
「この艦の武装の１つである１２７ｍｍ砲の発射する場面をお見せします。」
「１２７ミリホウ？あの大砲ですか？随分と砲身小さいですが・・・」
「はい・・・ですが、見た目はそう見えるかもしれませんね。」
いくら軍事が好きでも分からない事と分からないことがある。ある意味、フルで解説するには副長の軍精に頼むほか無かった。取りあえず、ＣＩＣへ連絡し、砲撃開始を伝えた。
「では、ご覧ください。」
１２７ｍｍ砲が発砲し、一瞬は普通と思ったものの数秒で考えが変わった。
「速い！」
気付いた時には５発撃ち尽くしていた。
「別名・・・速射砲とでもいいましょうか。」
「ソクシャホウ・・・何が起きたのか信じられません。あの小さな砲からあっという間に５発も撃ってしまうなんて。」
「砲弾は諸事情により取り出せませんが、薬莢程度ならお見せできます。恐らく、トリスティンの砲弾との違いが分かるかもしれませんし。」
驚いているアンリエッタであったが、暫くすると艦長席にて一息ついていた。

「艦橋ＣＩＣ、弾道はどうだ？」
「問題ありません。」
「よし、このまま哨戒を続けろ。」

ふっと外を見ると雨も止んできた。時間も時間であるし、女王と兵士達とトリスティンに送り戻すことにした。この世界のトリスティン王国は洋上船の発達は著しい物の港自体はあった。飛行船の発達により廃止されてしまったが・・・

「アンリエッタ女王、ヘリで城まで送ります。」
「ヘリ・・・とは？」
「ヘリコプター・・・回転翼機・・・今から向かいます！そっちの方が分かりやすいですし。」

後部甲板のＳＨ－６０Ｋを使い、城へ向かうことにした。とりあえず、女王乗船の飛行戦艦墜落という大事件があったことでトリスティン王国中大騒ぎの真っただ中だろう。観測班も墜落時にドラゴンを１匹確認しているし、おそらくはな・・・

「乗船した時も見ましたが、これがヘリコプターとは・・・これは空を飛ぶ乗り物ですね。」
「はい。操縦と防御はこちらの軍精が行ってくれます。」
「ムラサメさんはどうするのですか？」
「御同行しますよ。（学園も見ておきたいし。）」

という事で事前に食堂まで行き、食事を摂ってから城に向かうことにした。昼食は魔王姉妹特製の海軍カレーであった。話によるとレシピを見ながら１から作っていたらしい・・・必要材料も何故か冷蔵庫に入っててたとか。

トリスティン兵も腹が減っていたらしく、カレーの匂いにワクワクしている様子が見られた。

食事中は様々な会話が聞こえ、どの兵士からも満面な笑顔が溢れていた。アンリエッタ女王も満足してくれたらしく、おかわりする程であった。食事の最中にトリスティンまでの距離と方角を聞くと案外、約３０ｋｍ程であった。

食事が終わり３０分後に出発した。大陸上空にて飛行中に遅れながら副機長軍精からニミッツ級原子力空母「ケストレル」よりＦ－１４Ｄ　２機とＦ／Ａ－２７Ｃ　２機の護衛機が５分後に接触するとの事だった。

「このシートベルトにもだいぶ慣れてきました。着けた時は、ちょっと苦しかったですけど。」

「よくあることですよ。ちなみに武装は両方の窓より設置されてある機銃です。」

「機銃・・・トリスティンでも銃はありますので、どうゆうものなのかは分かりますけど、形が又、変わっておりますね。」

「僕がいた世界では銃は発達しておりますし、戦場では殆どを銃で占めておりますので発達した結果・・・わかりづからくなってしましたが。」

「名称はありますか？」

「形式ですが、７．６２ｍｍ機関銃で、銃弾はこれです。」

７．６２ｍｍ通常弾Ｍ８０を渡すと

「なんというか先端が鋭い形をしてますね。」

と言って、銃弾をムラサメに渡した。

５分後、、、定刻通り護衛戦闘機４機が護衛配置についた。速度差がありすぎる為、負担を掛ける飛行になってしまっていた。燃料に関しては問題はないらしいが・・・

＝＝トリスティン王国　ｓｉｄｅ＝＝

「女王陛下の安否はどうなっている！」

「未だに見つかっておりません！この緊急時に兵士の疲労も満杯であり、これ以上は・・・」

「平民上がりの軍が働かないとは役立たずめ！」

「ヴルアンス伯爵、兵士と言えども所詮は人の子です。疲れが溜まれば、役に立たなくなります。」

ただ議論を交わす貴族達であったが、聞いた事がない轟音が近づいてきた。

「何の音だ！」

「東の方向より聞こえてきます！」

無数の人が慌てて、外に出て上空を見上げると、そこにはＦ－１４Ｄ　２機とＦ／Ａ－２７Ｃ　２機が高度７００～１０００で飛行していた。

「あれは何なんだ？」

「知りませんよ！新手の龍では！？」

「あんな声を出す龍があるか！」

「アルビオンの新兵器じゃないのか！」

すぐさま龍騎士団だ迎撃に上がるが、戦闘機の高度にかてるはずが無く、高度６０００まで上がってしまいどうしようもできずにいた。

＝＝村雨　ｓｉｄｅ＝＝

「護衛戦闘機を先行させトリスティン周辺で良い着陸地点を探させろ。」

「了解。」

護衛戦闘機を先行させるが結果、煽ってしまうことになってしまった。トリスタニア城より多数の龍騎士が上がっていくのを確認できた。

「無用なトラブル・・・もう起きてるが、高度６０００にて偵察飛行にあたらせろ。」

さすがの龍でもこの高度に上れるわけはなく、途中で諦めていた。近づくにつれ此方に気づいた竜騎士数騎が向かってきた。何もしなければいいとは思ったものの、敵意がむき出しであった。横に着いた時点でドアを開け、アンリエッタが乗っていることを知らせた。すると竜騎士は吃驚したのか、敬礼をする姿が見えた。

数分後に良い着陸地点を見つけ着陸し、２人の護衛（ＳＣＡＲ－Ｌ　ホロサイト・Ｍ９２Ｆ・スタン）と共に城へ向かった。数分後に、血相を変えた家臣と兵士たちがヘトヘトになり駆けつけて来た。

「女王陛下！ご無事で・・・何よりです！」

「ご迷惑をお掛けしました。国は大丈夫ですか？」

「一部の強硬派の大臣が揉める程度で他は大丈夫です。」

問題はないと感じたアンリエッタは村雨を城に招待しようと思ったが、ケセドへ行く事を伝えられ、断念した。

「少々、残念ですがお時間が出来た際にいらしてくださいね。」

「ぜひとも！」

最後にトリスティン魔法学院の方角だけ教えてもらい、軍精と空路について打ち合わせた。燃料の問題は無いとの事でこの空路にした。出発しようとした矢先に問題が起きた・・・というより容赦がなかった。

「陛下！トリスティン魔法学院が・・・！反乱軍とアルビオン軍により占拠され多数の生徒と教師が人質に！」

「え！？」

突然の事態に驚愕してしまうアンリエッタであったが、直ぐに気を取り直し、救出部隊を派遣することを決定した。聞いていた村雨も協力を惜しまず、申し出た。

「アンリエッタ女王、僕にも協力させて下さい！」

「お願いします！」

ここである思惑が村雨にあった。

魔法学院に世話になりますた（前書き）

完全オリジナルな敵が登場します！注意しますが、この世界の原作ありの人物の性格は作者が原作通りではないので・・・

ちなみに軍事はかなり好きですが、詳しい動きまでは研究していないので、ご了承ください。

魔法学院に世話になりますた

トリスティン上空高度３０００ｍ　トリスティン魔法学院まで残り５分

トリスティン魔法学院占拠事件を受けて協力を申し出た村雨はトリスティン北部の３ｋｍ×３ｋｍの開けた台地に小規模な航空基地とＣ－１３０Ｊ×３機とＡＨ－６４Ｄ×２機とＦ－２２×４機を召喚した。現代兵器召喚は急激なスキルアップになり、現在はエリア８８規模の基地を半日で召喚可能になっている。

この作戦ではＳＥＡＬｓに相当する訓練を受けた軍精が新たに派遣された。他の軍精でもそうなのだが、派遣された際に臨時派遣官である妖精・・・リリー・ホワイトによると「条件はないですよー」と言いつつ「要望があれば全１４００万の軍精を送りますよー」とのことである。

投入した武装はＭｋ．１６　サプレッサー、Ｍ９２Ｆ　サプレッサー、スタンがメインである。

アメリカ軍の１０倍相当ですか・・・

緊迫する輸送機の中で上手く着地出来るか心配であった村雨であったが、その時が来た。レッドランプが点灯し、準備を始めた。

「スタンドアップ！」

命令には的確であり、素早い・・・さすがＳＥＡＬｓの訓練を受けて来ただけはある。

「点呼！」

後方の輸送タラップが開き、グリーンランプになるのを待った。

数秒後にグリーンランプになり、勢いよく空に飛び出した。初めてこの世界に降りた時もこの様な感覚が脳裏に走ったが慌てず約９００ｍの高度でパラシュートを開き地上の様子を確認しつつ降下した。ちなみにヘルメットはＧＲＡＷのゴーストチームで使われている物の改造バージョンだ。召喚したＭＱ－９からの偵察情報がＨＵＤに表示されており、敷地内に降下しても多少安全と言う事が確認出来ている。

１分後に無事着地し、部隊と合流した。ＭＧＳ以上のザル警備なのか単に人員不足なのか分からないが、人影はあまり見えなかった。ＮＶＤのお陰で視界が確保できており、入り口へ進んだ。女王の口からは「容赦は要らない」と言っていたが、こんな性格だったか？

敷地内にそれぞれ３～４人程兵士が確認したが、サプレッサーＭｋ．１６によ射殺された。静寂な動きで学院内に侵入し、それぞれの目標へ進んでいった。村雨の率いる部隊は食堂正面にて突入準備を図った。

内部を確認すると敵は約３０名程で、人質は数百名いた。知っている人物も何人もいる。アニエスも捕まっていた所を見ると手を出せない集団と悟った。強力な火炎魔法を使うボスにマスケット銃弾を防ぐ鎧にアルビオン魔術師（無駄に高等）がわんさか。

「スタングレネードは幾つある？」

「４つです。」

「ここは２つで行く。２人は窓に周り、投擲準備しろ。ピンはまだ抜くなよ。」

２人の軍精と別れ、更に内部を確認すると側面出入り口に集結している兵士を確認した。

「４人程側面側入り口に向かい、残りは正面だ。」

正面入り口６７ｍ９３ｃｍ程にある木では狙撃兵（ＳＲ－２５／サプレッサー）が待機している。

６秒ほどで配置が完了し、突入を決行した。

「スタングレネード投擲！」

の合図で窓が割れる音と共にスタンの爆発音が聞こえ、ドアを破って突入し、ありったけの銃弾を敵兵に浴びせた。スタンで混乱している中、無数の悲鳴と共に敵兵はバタバタ倒れていきボスのみを残し全滅した。ボスは正気を取り戻すと置かれた状況を理解した。

「そうか・・・全滅か！俺の精鋭は全滅！ファハハハ！」

高笑いを上げ、村雨を見る。

「貴様、どんな魔法を使ったのだ？強い閃光に気絶しそうな耳鳴り・・・」

「降伏すれば話してもいいぞ。」

「何が降伏だ！ここまで暴れておいて降伏なんてするか！すでに本国より増援が来るさ。」

ヘルメットに付属している無線機を使い戦闘空中哨戒に当たっているＦ－２２（２０ｍｍ機関砲４８０発／ＡＩＭ－１２０Ｃ×６／ＡＩＭ－９Ｘ×２）に問い合わせた。

「Ｕｎｋｎｏｗｎ３機捕捉、超低速にて学院に接近中。」

「撃墜・・・撃沈しろ。その艦隊はアルビオン軍の手先だ。非公式だから文句は無い。」

「レグナント１、了解。」

ボスは最後の反抗を匂わせる行動に出た。火炎魔法により周囲を焼き払おうとしていたが、

「駄目！その魔法は！」

の声が聞こえた瞬間、村雨と部隊のＭｋ．１６はフルオート射撃にてボスを制圧した。１１２発直撃しており、弁慶の如く立ったまま死んでいた。

人質を解放した後、Ｃ－１３０Ｊはトリスティン学院の近くに着陸した。周り２０００ｍは平原であった事で離着陸が可能であった。まともな滑走路は召喚不可能であるが・・・

数時間後に女王も学院に来られ、全員の無事を確認したのち、ホッとした様子が見られた。

「村雨さんにはどうお礼をすればいいのか・・・」

「勝手な要求ですが、あの人が寄り付かない北の大地が欲しいのですが。」

ある意味、土地を欲しいということであったが、女王からの返事は

条件付きで快諾であった。条件としてトリスティン王国が軍事攻撃を受けた際に、合同で防衛をすることであった（いわゆる安全保障条約的な感じ）。しばらくは学院長の部屋で雑談を行い、食堂にて平賀才人達と会話を交えた。

戻るため、Ｃ－１３０Ｊに向かうと学院生達が集まっていて見学をしている。ゼロ戦はあったのだが、スケールが違うというか、大型というか・・・軍精達も少々困っていたが、内部見学の許可を出し混乱を収めた。

Ｃ－１３０Ｊ　２番機の機長席にて外を眺めている時にケストレルから観測の為、発艦したＥ－２Ｃより連絡が入った。

「ガーディアンアイよりムラサメ、ワレ巨大ナ門ヲ発見セリ。」

巨大な門？タイタン専用だったりしてな・・・

結局、見学会で夜まで長引いてしまいトリスティン学院に泊る事にした。空き部屋に入ったが見事な部屋であった。ホテルに泊まっている感じがしたが・・・防音性は大丈夫だと思う。

武装を外し、ｉＰｈｏｎｅで拓哉に電話を掛けた。

＞＞もしもし？＜＜
＞＞よぉ！ビッグニュースだぞ！スーパーウルトラグレートデリシャスワンダフルニュースだ！＜＜
＞＞お前はいつからゆっこになった！で、ニュースとは？＜＜
＞＞ゼロの使い魔だよ！ゼロの使い魔！＜＜
＞＞何言ってんだ？とりあえず落ち着け！イミフだぞ！＜＜
＞＞ゴッホン！ゼロの使い魔の世界に遭遇した・・・この目で疑い

無くな！＜＜
＞＞写真！＜＜
＞＞待ってろ。＜＜

写真を送ると・・・

＞＞夢・・・ではないよな？＜＜
＞＞間違い無い！＜＜
＞＞信じられないぞ！スゲェ・・・＜＜
＞＞平賀才人にゼロ戦も！＜＜

興奮が抑えられない村雨であったが、更に・・・

＞＞時間軸からして・・・原作からかけ離れていてアニメ３期までの登場人物は殆どいるぐらい。ちなみにアンリエッタ女王より３ｋｍ分の大地を分けてくれたぜ。原作では無かった草原で、予定としては皆の安住の地と軍事基地の設立を予定しているんだ。＜＜
＞＞しっかしビックリだな。まさかゼロの使い魔の世界がな・・・＜＜
＞＞とりあえず、何かあったら追って知らせるよ！じゃな！＜＜
＞＞気をつけろよ！じゃあな！＜＜

と言って電話を切り、ベッドに入ろうとするとトントンと音がして誰かと思いきや才人であった。どうやらルイズの拷問・・・じゃなくてお仕置きから逃げてきたらしい。ドアの外からは釘宮ＶＯＩＣＥ・・・ルイズの声が聞こえているが、朝まで寝る感じではない為、ここはお気の毒ながら裏切る事にした。

「すまない、輸送機にデジタルカメラ忘れてきたわ。という事でよろしく！」

「ちょ！絶対に言うなよ！」
「大丈夫さ。安定した夜になるから大丈夫だ。」
といって部屋を後にした。
階段を下りた所でルイズに出くわした。
「ムラサメ！才人は見なかった？」
「僕の部屋にいますよ。」
とあっさり話すと、新幹線の如く部屋に向かって行った。
１階に下りた頃には悲鳴が聞こえていたが、南無南無・・・
とりあえず、ＳＯＮＹの最新のデジタルカメラを取り出し、部屋に戻るとシエスタがわざわざ片付けてくれていた。
「すいません、片付けをしてもらって。」
「いえ、構いませんよ＾＾」
とにっこりしながら部屋を後にしていった。これでようやく寝れると思ったら今度はコルベール先生が興味な目をしながら訪室して来た。Ｃ－１３０ＪからＭｋ．１６ことＦＮ　ＳＣＡＲ－Ｌまで現代に関する物すべてに興味があったようだ。原作の人が見たらなんて思うんだろうな・・・ある意味キャラ崩壊もあるから心配であった。
ようやく寝れたのは０時５６分であった。体力が限界になりつつ目を閉じた・・・
目を覚ましたのは６時間後の朝６時５６分であった。必死にノックしているのを聞き、飛び起きて開けると血相を変えた才人であった。今度はタバサといちゃいちゃ・・・ハルゲニア語を教えてもらっている最中にルイズに誤解されて追われているのだと言う。

「何か方法はないのか！マジで殺される！」
「ちょっと待て！スモークグレネードを・・・（待て！ここで渡したら僕の身が危ない！）」
「村雨～！」
「南無阿弥陀仏！南無阿弥陀仏！」
「お経唱えどうするんだ！」

ドアを開け、ルイズを招き入れた。
数分後に悲鳴が聞こえたのは言うまでもなかった。

朝食は学院生と同じ席にて召し上がった。流石、シェフの腕は一人前であった。
しばらく食事をしていると隣にルイズが遅れながら腰かけた。

「また才人が迷惑かけたわね。」
「大丈夫ですよ。いつもの・・・（おっと！）」
「いつもの？」
「何でもないです！」

駄目だ・・・釘宮ボイスだ。

朝食が終わり、学院内を見学したり授業を見学し、昼食後に出発した。
学園から約５０ｋｍ離れた所で、ＲＱ－４の撮影した写真より見覚えのある機関車が映し出された。それは、海の上を走る機関車であった。
新たに開拓の予感がした村雨はこの世界の隅まで遊覧する事に決めたのであった。

魔法学院に世話になりますた（後書き）

最初はヘリボーンにしようと思ったのですが、接続エラー連発で水の泡になってしまいました。

ウォーター7

トリスティン王国北大草原国境付近
ここに大規模な軍事基地を設立し、それに伴い新たに軍事兵器も召喚した。更に海に面していた為、軍港の召喚に加え、４００ｍ先にｉＰｈｏｎｅにしまってあった家を召喚し、ここを安住の地とした。フィリア達も間もなく来られ、フェアリー大船団がケセドへ着くまでＲＱ－４の映像から見守ることにした。他のメンバーもトリスティン王国に残ることにした。

村雨は少しながら残った処理を行った後、秋月で巨大な門を目指し進んでいった。最初は家族全員が心配そうにしていたが、なんとか心配を和らげる事が出来、安心した表情で見送ってくれた。

２日後の事である。

「前方に浮上している建物を発見！」
「ん？」

双眼鏡を覗くと海の上にぽつんと浮かんでいる家があり、近づき停船すると中から人が出てきた。

「これはまた凄い船だね！どこの国の船だい？」
「無所属です。この家は？」
「一種の中継所さ。向こうの世界と繋がっているのさ。」
「向こうの世界？」
「カリビアン海・・・少し進めば見えてくるが、巨大な門の先さ。」
「巨大な門？」
「遥か昔にあった海洋戦争時に作られた門さ。当時の海軍が二度と

戦争が起こらないよう建造したのさ。」
「海軍？・・・元帥は分かりますか？」
「これでも海軍監視官さ。元帥はセンゴクだよ。」
「んな！」

ここで確信したが、同時にワンピースの世界が混在した事に驚きを隠せなかった。

「おばさん、ありがとうございます！あの門はいつ開くんだ？」
「今は私の許可で通れるよ。あんたは悪そうな人でなさそうだし、許可を出すよ。」

簡単に通過の許可をもらい、６０分後に門を開けてもらうこととなった。

門が目視内に入り、近づくにつれその巨大な門に驚くのみであった。門はタイミング良く開き通過した。回りは開けているが、一隻の海軍の戦艦が近づいてきた。停船の合図が出ていた為、指示に従い停船した。
どうやら武装している事が原因で海賊か軍かどちらかを調べるための検問である。隣接し、橋を繋げると調査隊長と思わしき人物が顔を出した。若造であり、人の良さそうな人であった。

乗船してくると、艦長軍精共に米軍の敬礼をして迎えた。

「当艦の艦長のオータム・フォレストです。」
「当艦を統べる雄村雨です。」
「調査隊長のコビー少佐です。当世界の安全・秩序の為、調査を行わせてもらいます。」

コビーとは・・・ガープ中将の部下ではないか！まさかこの様な形で会えるとはな！

「私の顔に何か？」

「いえ。」

海軍戦艦を見るとどうやら見入っている兵士が多数見え、調査隊も艦に見入っていた。案内は軍精に任せコビーをＣＩＣまで連れて行った。

「こ、これは！！！」

「（安易に見せている自分て・・・見せなきゃ多分引き返しだな。）」

口がぽっかりあいたまま口を閉じないコビーは次元の違うＣＩＣ内を隅から隅へと歩いていた。あらゆる画面に顔を近付けたりしていたが、ＣＩＣ軍精達は特に気にしなかったようだ。

調査は２時間後に終え、通過の許可が下りた為、出発した。ちなみに秋月の事は海軍本部へ知らされたのは言うまでもなかった。海軍にしてみれば異常な加速力にスピード、更には未知の武装も搭載していたからな。軍精からの報告では調査隊の数人は武装が貧弱と馬鹿にしていたらしい。

だが帝国の丸い砲弾（榴弾？）ではイージス艦には軽い傷しか与えられんよ。

渡された海図では心伴い為、衛星に頼ることにした。だが、ここである事に気付いた。

やけに情報が入りやすくなっていた。それも異常なほどに・・・

ｉＰｈｏｎｅ（若本のグルメレース）が鳴り、電話に出ると光宏であった。

＞＞一大事だぞ！＜＜
＞＞どうした？＜＜
＞＞Ｇｏｏｇｌｅの人工衛星の８０％が消えたぞ！！＜＜
＞＞一大事過ぎるな・・・＜＜　嫌な予感がしていた。
＞＞だろ？＜＜

暫く会話が続いていたが、目途をつけて電話を切った。
その後、３０秒後に小町からメールが来た。

［よ、親友！ちょっとしたプレゼントを宇宙に浮かべておいたから好きに使ってね！］

プレゼント？

写真が送られると間もなく絶句した。

どう見てもＧｏｏｇｌｅ衛星です。本当に有難うございました！

送り戻すのは不可能らしいし使わせてもらうことにした。

それから2時間後、町に辿り着いた！巨大な造船ドックに巨大な街・・・ウォーター7！目の前にウォーター7！なんという感動的な光景！この時期のワンピースは毎回見ていた記憶を思いだしていたが、早速寄港する事とした。

海軍から渡された地図からして秋月が停泊できる場所は無いらしい

し、何でもお祭りがあるらしく港がパンク状態らしい。とゆうことでかのゴーイングメリー号が停泊していた岩礁（？）の近くに停泊した。水深の問題もあったが、高めの岩場へ接続が可能であった。ただ水深ギリギリだが・・・下手をすりゃソナー壊れるかな？

艦から降りるとあたりは岩だらけだが、翌々見ると人が沢山・・・特に騒ぐほどの事を起してないと思っていたのだが、接岩する際に遠くから見られていたらしい。

人が集まると一斉に疑問の目が向けられていた。鉄で出来た艦なんて早々見れるものではないし、そもそもこの隔たれた世界にある筈がないか・・・

ここは軍精達に任せ町に入った。まんまアニメで見た光景が広がっており、観光を開始した。片手にｉＰｈｏｎｅを握り撮影しながら楽しんでいた。

一時間後の事、、、あの事件のあった造船所に村雨の姿があった。

「ここが例の造船ドッグ！アニメのまんまじゃないか！」

翌々見るとドッグの前にあの人・・・アイスバーグの姿もあった。話しかけるのは避けておいて様子を見てみるとフランキー一味と口論しあっている模様・・・

こりゃ面白いと思いつつ秋月に戻ると案の定、多数の船大工が乗艦していた。一部の船大工はオート・メラーラ１２７ｍｍ砲を叩いたり、砲身を引っこ抜こうと必死になっていたりと・・・気持ちは分からんでもないが、艦を大事にしろやーーーー！

買い物も一通り済ませそろそろトリスタニアへ戻りたいと思ってい

た事もあり、現地民を全員降ろし、出港を再開した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1818t/

異世界遊覧記

2011年9月3日21時46分発行